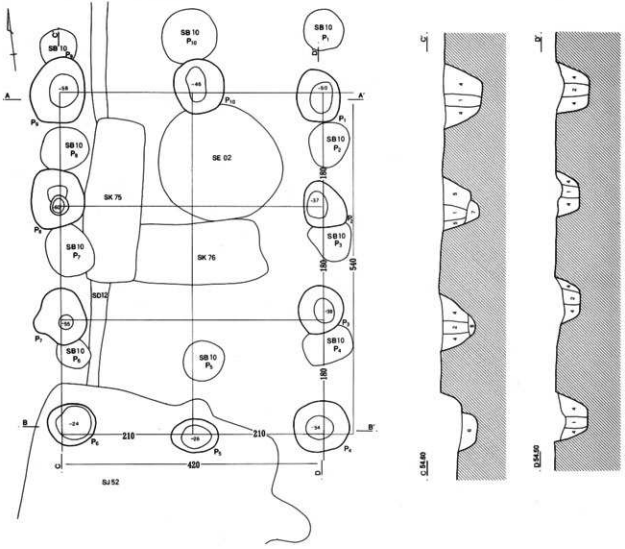
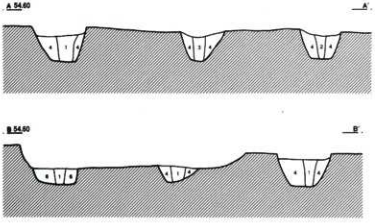
第192図　A区第９号掘立柱建物跡





SB09

1　明褐色土　ローム粒子少量。（柱痕）
2　明褐色土　焼土粒子やや多量
3　明褐色土　ローム粒子多量
4　暗褐色土　ロームブロック・焼土ブロックやや少量
　　焼土粒子少量
5　黒褐色土　ローム粒子多量
6　褐色土　ロームブロック混入
7　黄褐色土　ロームブロック主体。褐色土ブロック混入
8　褐色土　ロームブロック少量

る(第191図)。1は暗文坏。内面に放射暗文が施文される。混入であろう。2は土師器坏で、体部外面に墨書があるが、判読できない。3～5は須恵器坏。4の底部は回転糸切り後、手持ちヘラケズリ調整される。5はPit1から出土し、口径12.9cm。底部は回転糸切り後、周辺部及び体部下端が回転ヘラケズリ調整される。6は無台椀。口縁部と底部片があり、同一個体と思われる。Pit7出土。須恵器は全て南比企産である。建物跡の時期は、重複関係及び出土須恵器から熊野Ⅳ期古段階と考えておきたい。

A区第10号掘立柱建物跡（第193図）

A区第10号掘立柱建物跡は46･47－13グリッドに位置する。第9号掘立柱建物跡、第75号土壙、第12号溝跡に切られていた。第9号掘立柱建物跡は本建物跡と主軸が一致し、柱穴がほぼ重なることから、本建物跡から9号掘立柱建物跡に建て替えられたものと推定される。

3×2間、南北棟の側柱建物で、北側に廂が付く。全体の規模は桁行長6.40m、梁行長4.20mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

柱間距離は桁行1.60m、梁行2.10m等間に復元できるが、柱痕位置はややずれ気味である。廂の出は1.60mとなる。柱痕または柱抜き取り痕は明褐色土系の土で比較的明瞭に確認された(第1・2層)。第3・4層は掘り方埋土である。

柱穴は円形または楕円形基調で、長径40cm～90cm前後とやや小振りのものが多い。掘り込みレベルはやや差があり、Pit3・Pit11が浅い。

出土遺物は土師器坏と須恵器蓋がある(第193図)。1は円盤状つまみの付く須恵器蓋。Pit7出土。2・3は北武蔵型坏。2の底部は平底気味となり、内彎気味に直立する口縁部に続く。

建物跡の時期は、第9号掘立柱建物跡よりも古くなる。出土遺物からⅢ期後半に遡るものと考えられる。

A区第11号掘立柱建物跡（第194図）

A区第11号掘立柱建物跡は45－12・13グリッドに位置する。北側には第39号掘立柱建物跡が軸を揃えて並んでいる。第103号土壙が重複し、本住居跡の方が古い。また、第12号掘立柱建物跡が一部重複するが、新旧関係は明確にできなかった。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は長軸長6.30m、短軸長4.40mである。主軸方位はN－4°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.10m、梁行2.20mとなるが、柱痕位置はややずれ気味で等間にならない。柱痕または柱抜き取り痕はPit6・7を除く柱穴で確認された。柱痕埋土は暗褐色土で、掘り方はロームを少量含む黒褐色土を基調としていた。Pit6では版築状の堆積が認められた。

柱穴は円形または不整方形で、掘り込みレベルは比較的一定していた。

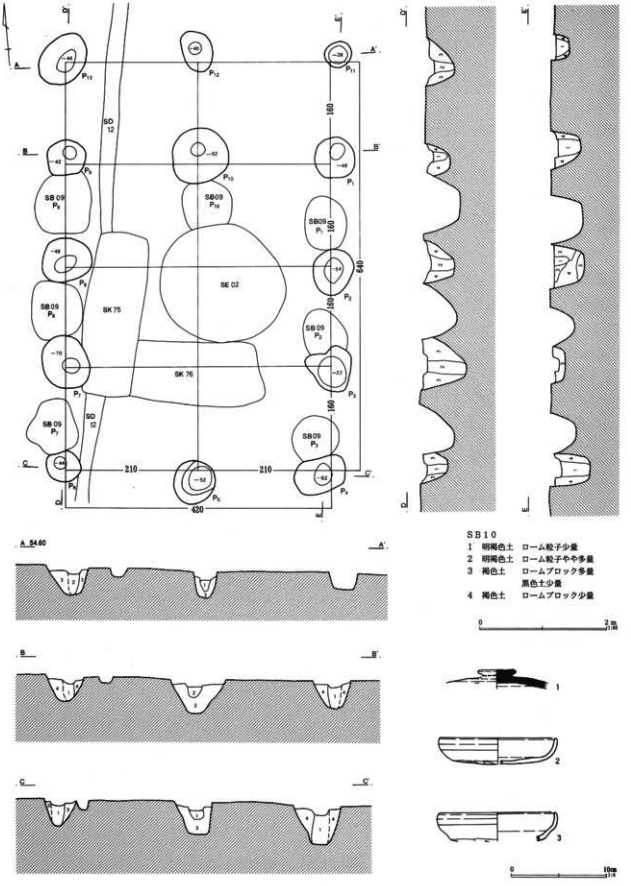
出土遺物は少なく、土師器暗文坏、須恵器坏・高台椀、青銅製帯金具がある(第195図)。青銅製帯金具は北西隅柱、Pit9の掘り方から検出された。第6号掘立柱建物跡でも青銅製帯金具が柱穴埋土から検出され、偶然に流入したとは思えない。おそらく地鎮として故意に埋め込んだ可能性が高いであろう。

1は平底暗文坏で、内面に放射暗文と螺旋暗文が施文される。2は須恵器坏。底径は大きいが、糸切後無調整と思われる。3は須恵器高台椀。4は青銅製帯金具の巡方である。長さ2.0cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmと小型で、歪みがあるがほぼ完存する。表裏両面は鋲止めされている。表面は黒ずみ、漆を塗布し

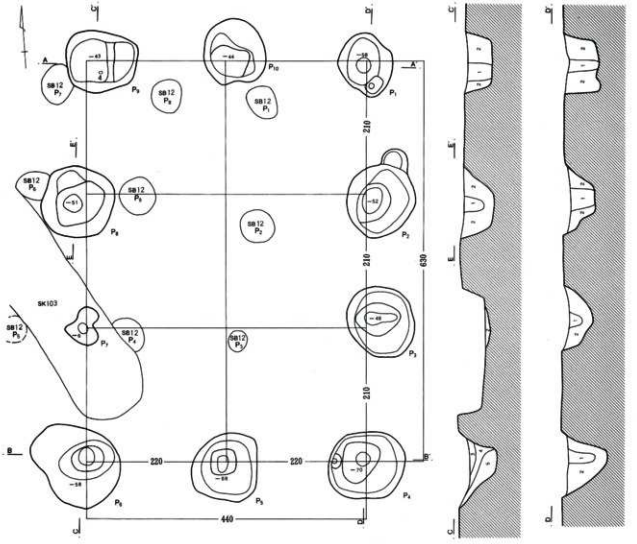
第94表　A区第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第193図）

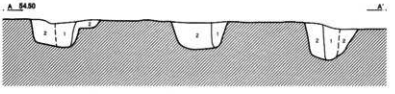
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵蓋		2.0		B片	A	灰色	25%	Pit7。末野産
2	土師坏	(12.2)	3.9		BC	B	暗褐色	15%	Pit4
3	土師坏	(12.2)	3.0		AB	B	赤褐色	10%	Pit4

第193図　A区第10号掘立柱建物跡・出土遺物

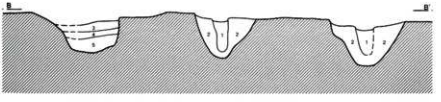


第194図　A区第11号掘立柱建物跡



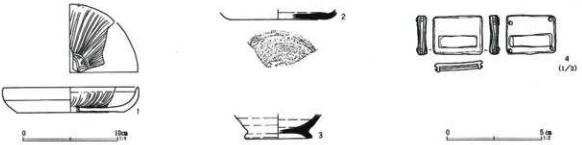


SB11
1　暗褐色土
2　黒褐色土　ローム粒子・ブロック少量
3　黒褐色土　ローム粒子・ブロック少量
4　ロームブロック
5　黒褐色土　ローム粒子・ブロック少量



0　2m

第195図　A区第11号掘立柱建物跡出土遺物



第95表　A区第11号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第195図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	(14.4)	2.6		BF	A	褐色	20%	Pit8掘り方。内面放射＋ラセン暗文
2	須恵坏		1.1	9.8	B片	B	灰褐色	25%	Pit8掘り方。末野産。底部B0手法か
3	須恵高台椀		2.5	(7.0)	B片	A	灰色	40%	Pit2掘り方。末野産
4	巡方	Pit9　No1。縦2.0cm。横2.6cm。厚さ0.3cm。重量6.35ｇ。青銅製帯金具							

た可能性がある。建物跡の時期は須恵器高台椀の特徴から熊野Ⅵ期を中心とした年代と考えられる。

A区第12号掘立柱建物跡（第196図）

A区第12号掘立柱建物跡は45－12グリッドに位置する。第103号土壙と重複し、本建物跡の方が古い。第11号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

2×2間の総柱建物で、規模は長軸長3.90m、短軸長3.30mである。主軸方位はN－9°－Eを指す。

柱の並びはやや悪く、Pit5は精査したにも関わらず検出できなかった。重複する第103号土壙に破壊されたものと考えられる。柱間距離は桁行1.95m、梁行1.65mとなるが、Pit9は中軸線から若干はずれる。柱痕はPit1・4で明瞭に確認できたが、他の柱穴では不明瞭であった。

柱穴は円形で、直径30～60cmと比較的小さく、ピットは掘り込みレベルも不揃いである。Pit9は最も浅く、柱筋もややずれるため、床束と考えた方が良かろう。

出土遺物はPit8から須恵器蓋が検出されたのみである（第196図）。1は須恵器蓋。推定口径15.3cm。胎土に片岩と雲母状微粒子、赤色粒子を含む。焼成は普通で、淡褐色を呈する。10%残。Pit8出土。末野産である。建物跡の時期は不明確であるが、末野産の高台椀蓋の存在から熊野Ⅳ～Ⅴ期を中心とする年代と考えておきたい。

A区第14号掘立柱建物跡（第197図）

A区第14号掘立柱建物跡は46·47－13·14グリッドに位置する。Pit5は第53号住居跡と重複するため、第53号住居跡床面を精査したが、検出されなかった。住居掘り方掘削時に破壊されたと考え、本建物跡の方が古いものと判断した。

2×2間の総柱建物で、規模は桁行、梁行共に4.50mである。主軸方位はN－8°－Eを指す。

柱間距離は桁行、梁行ともに2.25m等間にほぼ揃う。柱痕はPit8で検出された。柱痕埋土は黒褐色土で、掘り方はやや色調が明るくロームブロックが多く含まれていた。

柱穴は円形基調である。概して小振りで、直径40cm前後のものが多い。掘り込みは比較的深く、40～60cmほどであるが、Pit6・9が浅い。

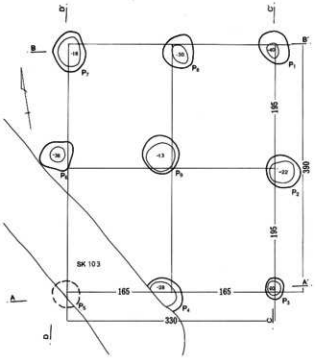
出土遺物は検出されなかった。建物跡の時期は不明確であるが、第53号住居跡との関係から熊野Ⅵ期、またはそれ以前という限定はできる。

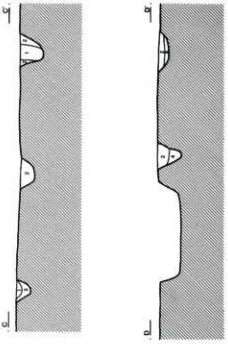
A区第15号掘立柱建物跡（第198・199図）

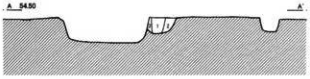
A区第15号掘立柱建物跡は44－11グリッドに位置する。重複する第19号掘立柱建物跡を切り、第68・69・71号住居跡、第132号土壙に切られていた。

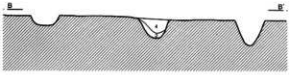
2×2間の建物で、Pit6・Pit9は第69号住居跡の床面下にかろうじて残存しており、総柱の倉庫状建物跡と考えられる。規模は桁行長5.40m、梁行長

第196図　A区第12号掘立柱建物跡・出土遺物

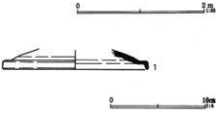








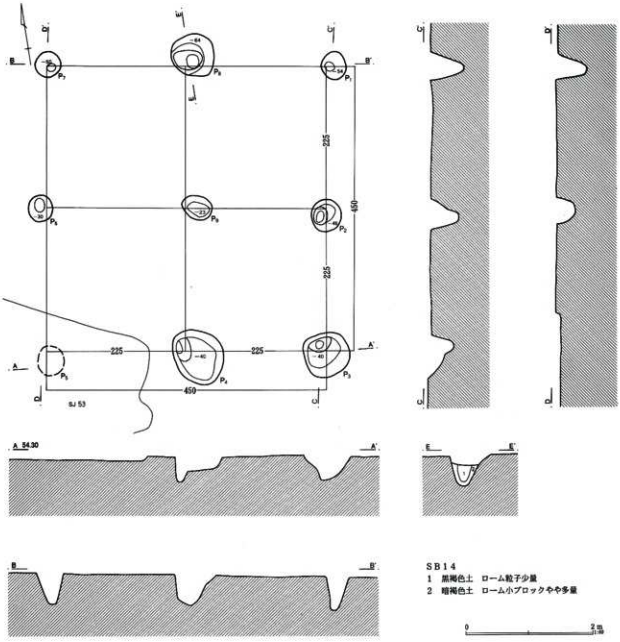
SB12
1　褐色土　　焼土・ローム粒子微量
2　褐色土　　ロームブロック少量。焼土粒子やや多量
3　黄褐色土　ローム粒子・褐色土ブロック混入
4　褐色土　　ロームブロック混入



第96表　A区第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第199図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵壺		4.7		B片	B	濃灰色		Pit1 掘り方。末野産。沈線＋櫛描波状文
2	土師暗文坏	(13.0)	3.0		BC	A	褐色	15%	Pit8 掘り方。内面斜格子暗文
3	土師暗文坏	(15.6)	3.4		BC	A	赤褐色	10%	Pit8 掘り方　内面放射暗文
4	土師暗文坏	(17.0)	4.5		BC	A	赤褐色	10%	Pit7 掘り方。内面斜格子暗文
5	土師坏	(12.4)	3.1		BC	A	茶褐色	15%	Pit7
6	土師坏	(13.0)	3.5		ABC	A	褐色	5%	Pit7。断面サンドイッチ状に還元部あり
7	土師坏	(14.2)	2.6		BC	A	茶褐色	5%	Pit8 掘り方
8	土師坏	(14.0)	3.2		ABC	A	褐色	10%	Pit4
9	土師坏	(15.0)	3.4		BC	A	褐色	10%	Pit8 掘り方
10	土師皿	(14.0)	3.0		BC	A	茶褐色	15%	Pit1 掘り方上層
11	土師坏	(18.2)	4.1		BC	A	濃褐色	15%	Pit8 掘り方
12	土師内黒椀	(14.8)	4.3		BD	A	橙褐色	10%	Pit4。口縁下に沈線一条。内外面ミガキ。内面黒色処理
13	土師皿	(15.6)	3.0		ABC	A	橙褐色	10%	Pit5
14	土師皿	(20.0)	2.7		BC	B	濃褐色	5%	Pit1柱痕
15	不明鉄製品	Pit8上面・掘り方。残長17.1cm							
16	不明鉄製品	Pit8							

第197図　A区第14号掘立柱建物跡



4.50mである。主軸方位はN－7°－Eを指す。

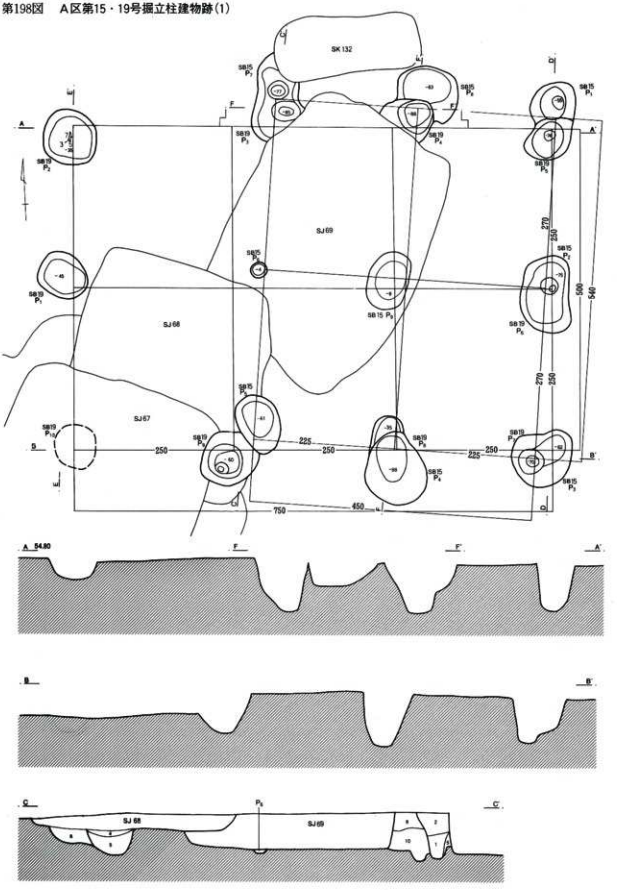
柱間距離は桁行2.70m、梁行2.25mとなるが、Pit 5は柱筋がややずれ気味である。

柱穴は円形または楕円形で、深さは70cm前後のものが多く全体に深くてしっかりしたつくりである。

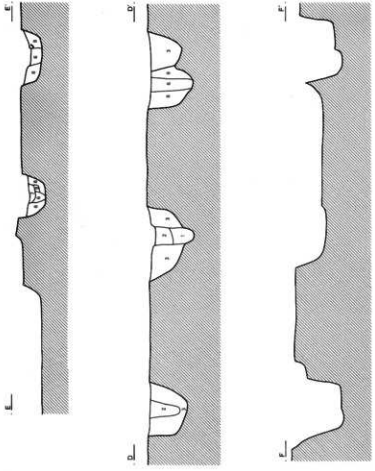
出土遺物は土師器坏・暗文坏・Ⅲ・内黒椀、須恵器甕、鉄製品がある(第199図)。Pit 1・4・5・7・8から検出されているが、いずれも破片である。1は須恵器甕。2～4は暗文坏で、2・4は斜格子暗文が施文される。5～9・11は底部丸底形態の北武蔵型坏である。12は内面黒色処理がなされた椀。両面共に丁寧なヘラミガキ調整され、口縁部には1条の沈線が巡る。10・13・14は土師器皿。15・16はPit 8上面から検出された鉄製品。用途不明である。

建物跡の時期は中世の竪穴状遺構に切られており、古代に遡るのは間違いない。出土遺物は8世紀前半にほぼ限定されることから、熊野Ⅱ期を中心とした時期と捉えておきたい。

第198図　A区第15・19号掘立柱建物跡(1)

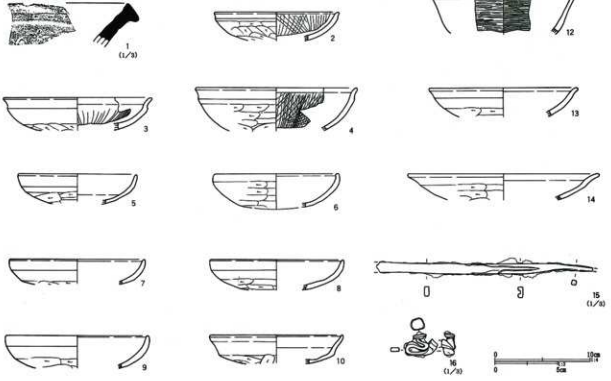


第199図　A区第15・19号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



SB15・19

1　褐色土　ローム粒子微量
2　褐色土　小ブロック・ローム粒子混入焼土粒子やや多量
3　褐色土　黒色土・ローム ブロック混入 焼土粒子多量
4　褐色土　小ブロック少量。ローム粒子混入焼土粒子やや多量
5　黒色土　焼土粒子やや多量。ローム粒子少量
6　褐色土　焼土粒子多量
7　褐色土　焼土粒子多量。灰白色粘土ブロック混入
8　褐色土　黒色土・ロームブロック・焼土粒子混入
9　褐色土　焼土ブロック・粘土ブロック多量
10　黒色土　焼土粒子やや多量。ローム粒子少量

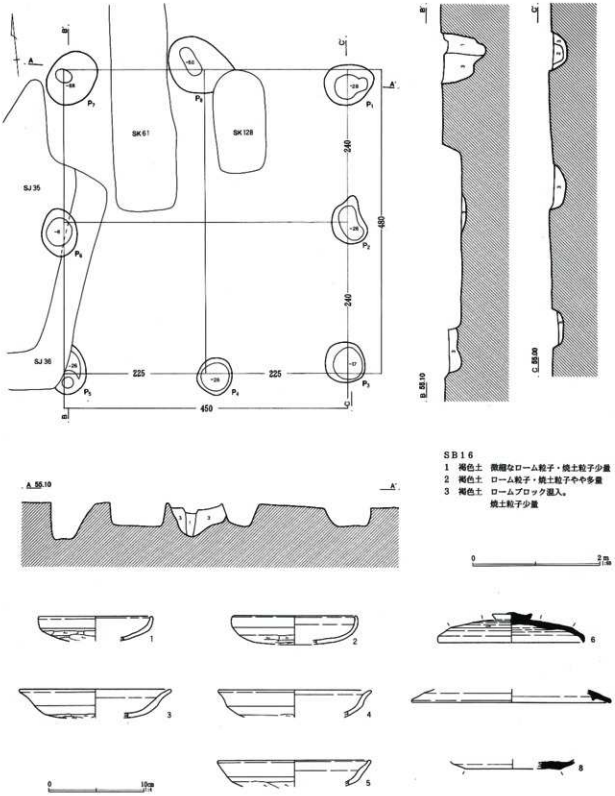


A区第16号掘立柱建物跡（第200図）

A区第16号掘立柱建物跡は43·44－10グリッドに位置する。第35・36号住居跡、第128号土壙に切られていた。また、第17・18号掘立柱建物跡とも重なるが、柱穴相互の切り合いはない。

2×2間の倉庫風建物であるが、床束は存在しな

第200図　A区第16号掘立柱建物跡・出土遺物



第97表　A区第16号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第200図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(12.0)	2.6		BC	A	赤褐色	20%	Pit8
2	土師坏	(12.9)	3.0		BC	A	褐色	10%	Pit7
3	土師皿	(16.0)	3.0		BC	A	茶褐色	15%	Pit8
4	土師皿	(16.0)	2.8		B	B	茶褐色	15%	Pit7
5	土師皿	(16.0)	2.7		BC	A	褐色	10%	Pit7
6	須恵蓋	15.4	3.2		BD	B	淡灰色	55%	Pit7。末野産
7	須恵蓋	(20.8)	1.4		B	B	濃灰色	5%	Pit3。末野産
8	須恵椀		1.0	(10.0)	B針	A	灰色	15%	Pit8。南比企産。底部回転ヘラケズリ

い。規模は桁行長4.80m、梁行長4.50mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.40m、梁行2.25mとなる。Pit 1・7・8からは柱痕または抜き取り痕が確認された。埋土は褐色で、焼土粒子の含有が多い点は特徴的である。

柱穴は円形で、直径60cm前後のものが多い。底面レベルは比較的均一であるが、Pit 7が最も深い。

出土遺物は土師器坏・皿、須恵器坏・蓋が検出された(第200図)。土師器坏(1・2)は扁平化した弱い丸底形態である。3～5は皿。6は約1/2強遺存する須恵器蓋で、つまみは扁平な擬宝珠。かえりは消失しているもので、口径14～14.5cm程の坏身と組み合うと予想される。末野産。7はかえり蓋の小片。8は底部回転ヘラケズリ調整される坏または椀。南比企産である。

建物跡の時期は第35・36号住居跡との切り合いから熊野Ⅵ期以前となるのは間違いない。出土遺物は熊野Ⅱ期～Ⅲ期古段階に位置付けられることから、建物は熊野Ⅲ期頃構築されたと考えておきたい。

A区第17号掘立柱建物跡（第201図）

A区第17号掘立柱建物跡は43・44－10グリッドに位置する。重複する第35・36号住居跡、第60・61・129号土壙に切られている。第16号掘立柱建物跡とも重複するが、柱穴同士の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

正確な建物規模は不明確だが、4×2間、東西棟の建物と考えた。Pit 8・9は検出されず、また、Pit12は柱筋からずれ気味である。規模は桁行長5.40m、梁行長3.90mである。主軸方位はN－9°－Eを指す。

桁行の柱間距離は1.40mと1.20mと等間に揃わず、且つ狭い。梁行のそれは1.95mである。埋土は全体に焼土が多量に含まれており、共通している。第1層は柱穴抜き取り痕か。第2層以下は掘り方埋土である。

柱穴は円形または楕円形を基調とし、直径50～60cm前後が多い。深さは20～50cm前後と比較的浅い。

出土遺物は少なく、土師器坏・暗文坏・Ⅲ・小型甕がある(第201図)。2・3は丸底暗文坏、4は扁平な丸底風となる北武蔵型坏である。出土遺物は8世紀前半代に位置付けられ、重複する第16号掘立柱建物跡と時期的に近い。埋土や建物方位も近似し、直接建て替えた可能性が高い。時期は熊野Ⅱ期と考えておきたい。

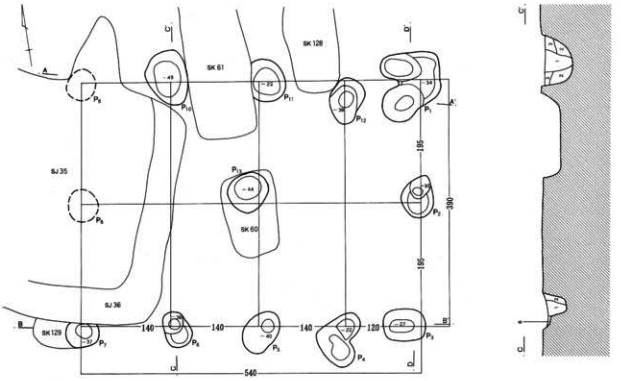
A区第19号掘立柱建物跡（第198・199図）

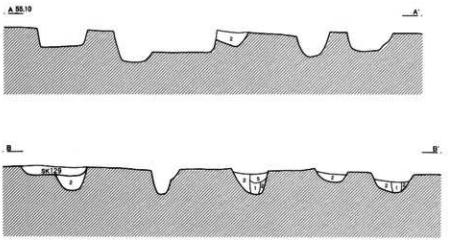
A区第19号掘立柱建物跡は44－10・11、45－11グ

第98表　A区第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第201図）

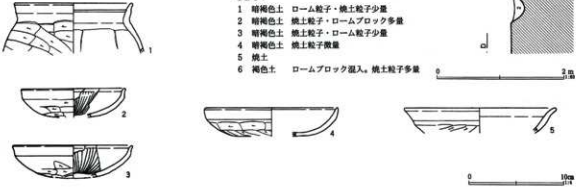
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師小型甕	(12.2)	5.2		BCD	B	茶褐色	20%	Pit10
2	土師暗文坏	(11.0)	3.0		AB	A	橙褐色	10%	Pit1。内面放射暗文
3	土師暗文坏	(12.5)	3.3		AB	A	橙褐色	10%	Pit1。内面放射暗文
4	土師坏	(14.0)	3.0		BC	A	茶褐色	15%	Pit1
5	土師皿	(16.0)	2.6		BC	A	橙褐色	10%	Pit10

第201図　A区第17号掘立柱建物跡・出土遺物

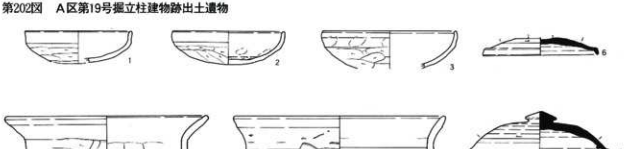




SB17
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
2　暗褐色土　焼土粒子・ロームブロック多量
3　暗褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量
4　暗褐色土　焼土粒子微量
5　焼土
6　褐色土　ロームブロック混入。焼土粒子多量



第202図　A区第19号掘立柱建物跡出土遺物



第99表　A区第19号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第202図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	11.2	3.4		BD	A	褐色	65%	Pit2
2	土師坏	11.8	3.5		ABD	A	赤褐色	80%	Pit2
3	土師坏	(14.0)	4.0		BD	A	褐色	25%	Pit2 №3
4	土師甑	(21.2)	7.7		ABC	A	褐色	10%	Pit2
5	土師甑？	(22.2)	6.7		ABC	A	褐色	20%	Pit2 №2
6	須恵蓋	(12.2)	1.8		B針	A	灰色	20%	Pit2。南比企産。つまみ欠失
7	須恵蓋	15.0	4.5		BC	C	灰黒色	80%	Pit2 №1。末野産

リッドに位置する。第15号掘立柱建物跡、第67～69・71号住居跡が重複し、本建物跡が最も古い。

調査段階では、Pit１・２を含めた３×２間の建物で、Pit３～Pit９は第15号掘立柱建物跡と柱穴が重複するものと考えたが、Pit１・２は他の柱穴に比較して深度が浅く、Pit３の柱間間隔がずれてしまう。Pit１・２を除外して、本建物跡から第15号掘立柱建物跡に、ほぼ同位置、同規模で建て替えされたと解釈した方が妥当かもしれない。ここでは、３×２間の建物という前提で述べると、規模は桁行長7.50ｍ、梁行長5.00ｍである。主軸方位はN－4°－Wを指す。

柱間距離は桁行・梁行ともに2.50ｍと考えられる。Pit６は第15号掘立柱建物跡Pit３と同位置で重なり、Pit10は第67号住居跡に破壊されたことになる。

柱穴は円形基調で、深さはPit１・２が浅く35～45cm、他のピットは60cm～90cmと深くてしっかりしている。

出土遺物は土師器坏・甑、須恵器蓋がある（第202図）。全て、Pit２から出土したもので、Pit１・２の解釈によっては本建物跡には伴わない可能性もある。但し、その場合でも他の建物に伴う可能性はなく、本建物に付属する何らかの柱穴（土壙）と考えることはできる。１・２は残存率の高い土師器坏。丸底の北武蔵型坏である。４・５は甑と思われる。６は南比企産の須恵器蓋。小振りの高台杯蓋か。７は末野産のかえり蓋である。出土遺物の時期は熊野Ⅱ期に位置付けられよう。重複する第15号掘立柱建物跡との関係からみても概ね同時期と考えても齟齬はなく、熊野Ⅱ期と捉えておきたい。

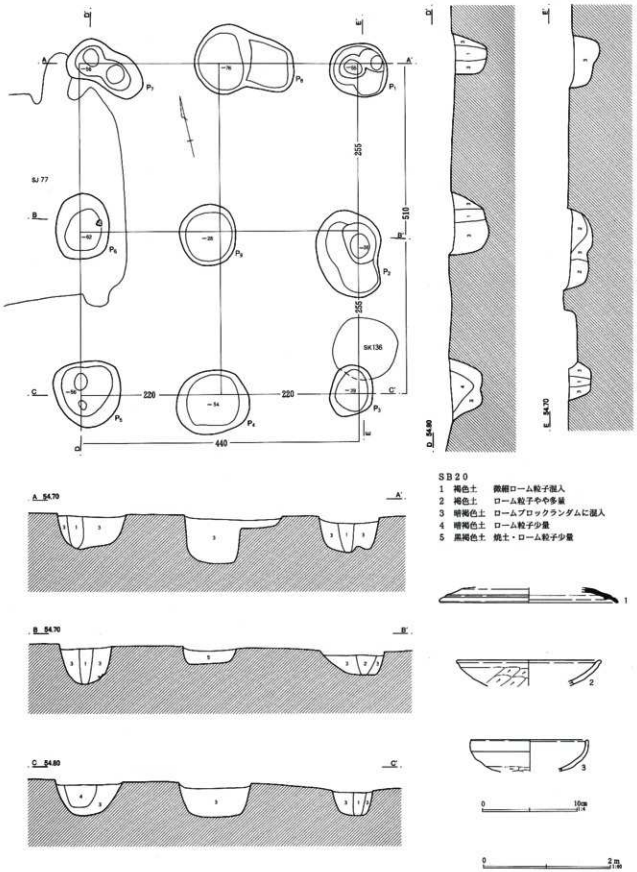
A区第20号掘立柱建物跡（第203図）

A区第20号掘立柱建物跡は43－11・12グリッドに位置する。第77号住居跡が重複し、平面及び断面観察から本建物跡の方が新しいことが確認された。第136号土壙はPit３を切っていた。

２×２間の総柱建物であるが、Pit９は他の柱穴埋土よりも黒味が強く、深度も浅い点で、本建物の柱穴として良いかやや疑念もある。規模は桁行長5.10ｍ、梁行長4.40ｍである。主軸方位はN－13°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.55ｍ、梁行2.20ｍとなる。Pit１・３・６・７では明瞭に柱痕が検出された。柱痕埋土は褐色土で、掘り方はローム混じりの暗褐色土

第203図　A区第20号掘立柱建物跡・出土遺物



第100表　A区第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第204図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	須恵蓋	(18.8)	1.6		BC	A	灰黒色	5%	Pit1。末野産か
2	土師皿	(15.2)	2.7		BC	A	橙褐色	10%	Pit7
3	土師坏	(12.3)	3.3		BC	A	褐色	15%	Pit2

を基調としていた。

出土遺物は土師器坏・皿、須恵器蓋がある（第203図）。1は須恵器蓋で内面にかえりが付く。2は暗文皿系の器形であるが暗文は施文されない。3は丸底の北武蔵型坏。出土遺物は熊野Ⅱ期に相当する。

重複する第77号住居跡も同期に属するもので、本建物跡の時期としては熊野Ⅱ期またはそれ以降と考えられる。

A区第21号掘立柱建物跡（第205図）

A区第21号掘立柱建物跡は43－10・11グリッドに位置し、第20号掘立柱建物跡の西側に隣接する。重複する第77号住居跡を切り、第72号住居跡に切られていた。また、第22号掘立柱建物跡とも重複し、平面及び観察により本建物跡の方が新しいと判断したが、重複部が少なく新旧関係は微妙である。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長6.00m、梁行長4.20mである。主軸方位はN－11°－Eを指す。

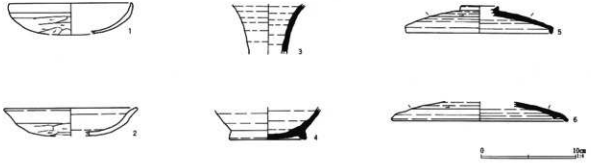
柱間距離は桁行2.00m、梁行2.10mとなるが、柱痕の残存する位置から測定すると等間には揃わない。埋土は第1層が柱抜き取り痕と思われる。第2・3層が掘り方埋土である。

柱穴は円形で、妻側の柱がやや規模が大きく、梁行のPit2・3、Pit7・8が小さい。深さは30～50cm前後が主体となる。

出土遺物は土師器坏・皿、須恵器蓋・長頸瓶がある（第204図）。1はやや扁平化した丸底の北武蔵型坏。3・4は湖西産の長頸瓶である。3は胎土がやや粗く秋間産の可能性もある。5は環状つまみの蓋。かえりはない。つまみ推定径は4.0cmとやや小型化している。南比企産の可能性がある。6は末野産のかえり蓋。口縁部に面をもち特殊かえり蓋とされるものに近い形態である。末野産。出土遺物の時期は熊野Ⅱ～Ⅲ期のものが含まれている。

建物跡の時期は重複住居との関係から、熊野Ⅱ期以降Ⅵ期以前という限定ができ、出土遺物及び重複する第22号掘立柱建物跡との関係を考慮して熊野Ⅲ期を中心とした時期と考えておきたい。

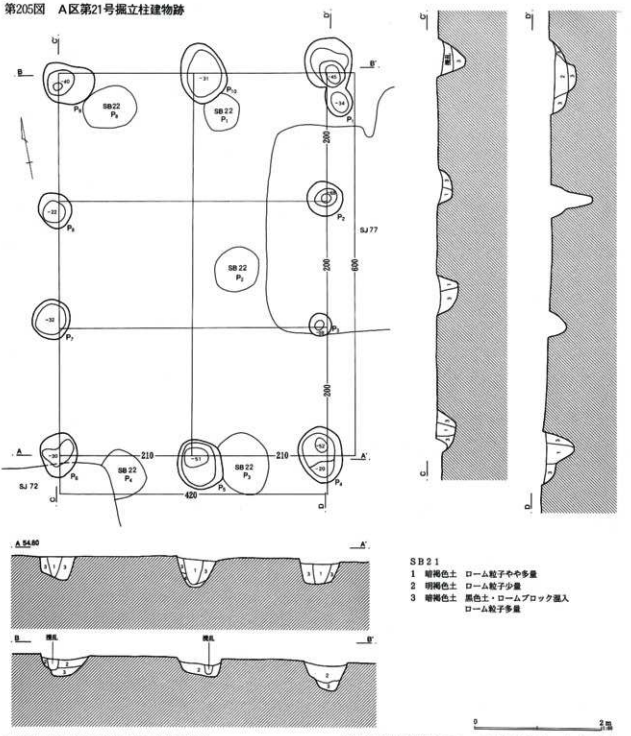
第204図　A区第21号掘立柱建物跡出土遺物



第101表　A区第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第204図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	13.0	3.2		ABD	A	褐色	15%	Pit6
2	土師皿	(14.0)	2.9		BC	A	橙褐色	10%	Pit1
3	須恵長頸瓶		5.3		BH	A	灰白色	20%	Pit5。湖西産か
4	須恵瓶		3.4	8.0	BCH	A	灰色	30%	Pit10。湖西産。底部回転ヘラケズリ後高台貼付
5	須恵蓋	15.4	2.8		B	B	灰白色	15%	Pit5。南比企産か。白色針状物質なし
6	須恵蓋	18.6	2.0		B片	B	灰褐色	20%	Pit9。末野産。天井部ヘラケズリ

第205図　A区第21号掘立柱建物跡



A区第22号掘立柱建物跡（第206図）

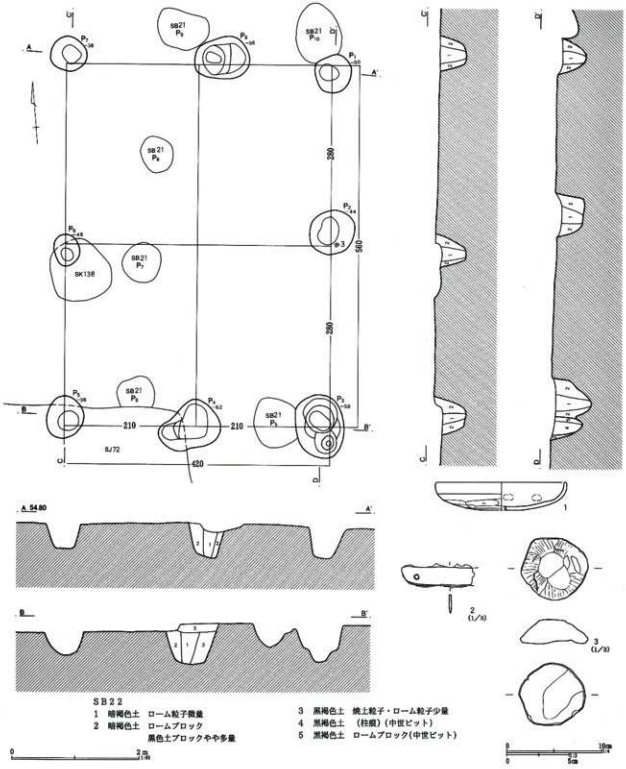
A区第22号掘立柱建物跡は43−10・11グリッドに位置する。第72号住居跡、第21号掘立柱建物跡、第138号土壙と重複し、本建物跡が最も古い。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長5.60m、梁行長4.20mである。主軸方位はN−5°−Eを指す。

柱間距離は桁行2.80m、梁行は2.10mとなるが、柱痕位置から測定すると等間には揃わない。埋土は第1層が柱痕または抜き取り痕、第2層が掘り方埋土と思われる。

柱穴は円形または楕円形で、直径50〜90cm前後である。深さは40cm〜60cm前後と比較的しっかりしている。

第206図　A区第22号掘立柱建物跡・出土遺物



第102表　A区第22号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第206図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(13.6)	2.9		BCD	A	淡褐色	20%	Pit3
2	鉄製穂摘具か	Pit3 掘り方。残長5.7cm。幅1.4cm。孔あり							
3	石製紡錘車	Pit2 No1。重さ59.76g。紡錘車未完成品							

出土遺物は土師器坏、鉄製品、石製紡錘車未製品がある(第206図)。1は扁平な器形で、底部丸底風の北武蔵型坏。2は鉄製穂摘み具か。下部に刃が付き、左端に紐通しの孔が穿たれている。3は石製紡錘車未製品と思われる。截頭円錐形に整形され、側面は粗く研磨されている。

建物跡の時期は不明確であるが、重複遺構との関係から熊野Ⅵ期以前となるのは確実である。出土した土師器坏は熊野Ⅲ期が妥当と思われ、本掘立柱建物跡の時期は熊野Ⅲ期と考えておきたい。

A区第23号掘立柱建物跡(第208図)

A区第23号掘立柱建物跡は43－12グリッドに位置し、西側に第20号掘立柱建物跡が隣接する。重複する第24号掘立柱建物跡との新旧関係は、Pit5の平面観察から本掘立柱建物跡の方が古いものと判断した。両建物はほぼ同一地点にあり、規模も同一であることから本建物跡から第24号掘立柱建物跡に建て替えられたものと考えられる。また、東側の桁行は第11号溝跡によって削平され、遺存状態は悪い。

なお、建物東半は町教育委員会によって調査されている。

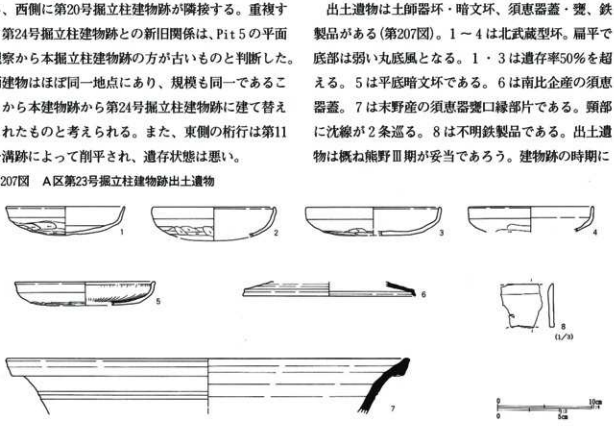
2×2間、ほぼ方形の総柱建物で、規模は桁行長4.20m、梁行長3.90mである。主軸方位はN－4°－Eを指す。規模・形態から倉庫と考えて良かろう。

柱間距離は桁行2.10m、梁行1.95mとなる。Pit6・7からは柱抜き取り痕が確認された。埋土は褐色土で、掘り方にはロームブロックが多量に混在していた。

柱穴形態は楕円形や不整方形がある。深さは40cm～76cmと深くてしっかりしたものが多いなかで、中心柱のPit9は40cmと最も浅い。

出土遺物は土師器坏・暗文坏、須恵器蓋・甕、鉄製品がある(第207図)。1～4は北武蔵型坏。扁平で底部は弱い丸底風となる。1・3は遺存率50%を超える。5は平底暗文坏である。6は南比企産の須恵器蓋。7は末野産の須恵器甕口縁部片である。頸部に沈線が2条巡る。8は不明鉄製品である。出土遺物は概ね熊野Ⅲ期が妥当であろう。建物跡の時期に

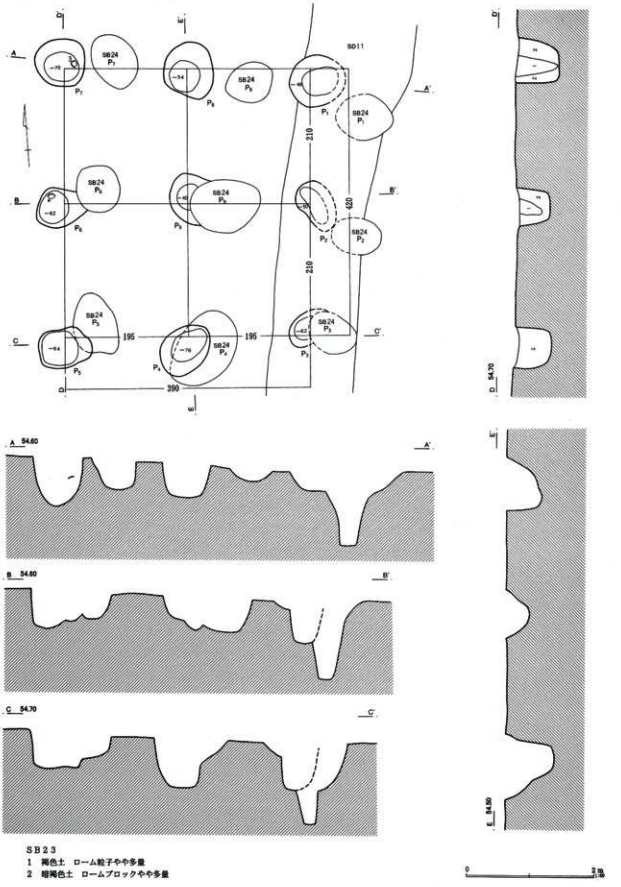
第207図　A区第23号掘立柱建物跡出土遺物



第103表　A区第23号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第207図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.5	3.0		ABCD	A	淡褐色	70%	Pit7
2	土師坏	(13.0)	3.1		ABG	A	明褐色	20%	Pit6
3	土師坏	(14.2)	3.0		BC	A		50%	Pit7 No.1
4	土師坏	(13.2)	2.7		ACD	A	褐色	10%	Pit8
5	土師暗文Ⅲ	14.8	2.4		ABDG	A	明褐色	35%	Pit8。内面放射状暗文
6	須恵蓋	(18.2)	1.5		C針	A	灰白色	5%	Pit6。南比企産。重ね焼き痕あり
7	須恵甕	(42.3)	5.9		B片	A	灰色	5%	Pit7。末野産
8	不明鉄製品	Pit7。縦3.4cm。横3.1cm。厚さ0.4cm。板状							

第208図　A区第23号掘立柱建物跡



SB23
1　褐色土　ローム粒子やや多量
2　暗褐色土　ロームブロックやや多量

関しては、出土遺物から熊野Ⅲ期を主体とした時期と考えておきたい。

A区第24号掘立柱建物跡（第210図）

A区第24号掘立柱建物跡は43－1・2グリッドに位置する。重複する第23号掘立柱建物跡を切っていたことから、第23号掘立柱建物跡から本建物跡に建て替えられたものと考えられる。また、東側柱列は第11号溝跡に破壊されて遺存状態は極めて悪い。建物東半は町教育委員会によって調査されている。

2×2間、総柱構造の建物跡で、規模は桁行長4.00m、梁行長3.60mである。柱筋は概ね通るが、柱穴心々を結ぶと全体に台形に近い配置となる。主軸方位はN－76°－Wを指す。柱間距離は桁行2.00m、梁行1.80mとなる。

柱穴は円形または楕円形で、直径60～120cm前後である。深さは20～50cmと全体に浅い。

出土遺物は少なく、土師器暗文坏と須恵器坏が検出された（第209図）。1は丸底の暗文坏で、内面に放射暗文が施文される。2は須恵器坏底部で、底部と体部下端は回転ヘラケズリ調整される。

建物跡の時期は第23号掘立柱建物跡との関係から熊野Ⅲ期またはそれ以降となる。出土遺物はⅡ期～Ⅲ期と思われ矛盾はない。第23号掘立柱建物跡から直接的に建て替えられたと考えれば、熊野Ⅲ期、降ってもⅣ期の建物と見て良かろう。

A区第25号掘立柱建物跡（第211図）

A区第25号掘立柱建物跡は43－9グリッドに位置する。第27・35号住居跡、第35号土壙と重複し、本建物跡が最も古い。Pit2は第35号土壙によって削平され遺存しない。Pit3は第35号住居跡床面下に辛うじて検出できた。

2×2間、方形の側柱建物で、規模は桁行長、梁行長ともに4.00mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

柱間距離はほぼ2.00m等間に揃う。埋土は第1層が柱痕または抜き取り痕。第2層が掘り方埋土でロームブロックが多く混入していた。

柱穴は円形または楕円形で、直径60cm前後が主体となる。掘り込み深度は隅柱が深く、中間柱が浅い傾向にある。

出土遺物はPit7から土師器坏が1点検出されたに留まる（第211図）。1は土師器坏。推定口径12.4cm。胎土に角閃石・白色粒子・石英を含み焼成は良好である。色調は淡褐色で、約15%残存する。Pit7出土。口縁部は緩やかに外反気味で、底部は平底風となろう。体部は無調整である。

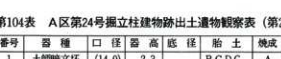
建物跡の時期は第35号住居跡との関係から、熊野Ⅵ期以前となることは間違いない。出土した土師器坏は熊野Ⅲ期以前には遡らず、Ⅳ期～Ⅴ期が妥当であろう。本建物の時期は出土遺物から熊野Ⅳ期～Ⅴ期と考えておきたい。

A区第26号掘立柱建物跡（第212図）

A区第26号掘立柱建物跡は42－9・10グリッドに位置し、第86号住居跡の東に隣接する。第27・28・32号掘立柱建物跡と重複している。第27号掘立柱建物跡との新旧関係は本建物跡の方が古い。第32号掘立柱建物跡との関係は明確にできなかった。28号掘立柱建物跡は柱穴同士の切り合いはないが、中世の建物と思われる。

3×2間、東西棟の側柱建物で、規模は桁行長6.90m、梁行長5.00mである。主軸方位はN－84°－Wを指す。

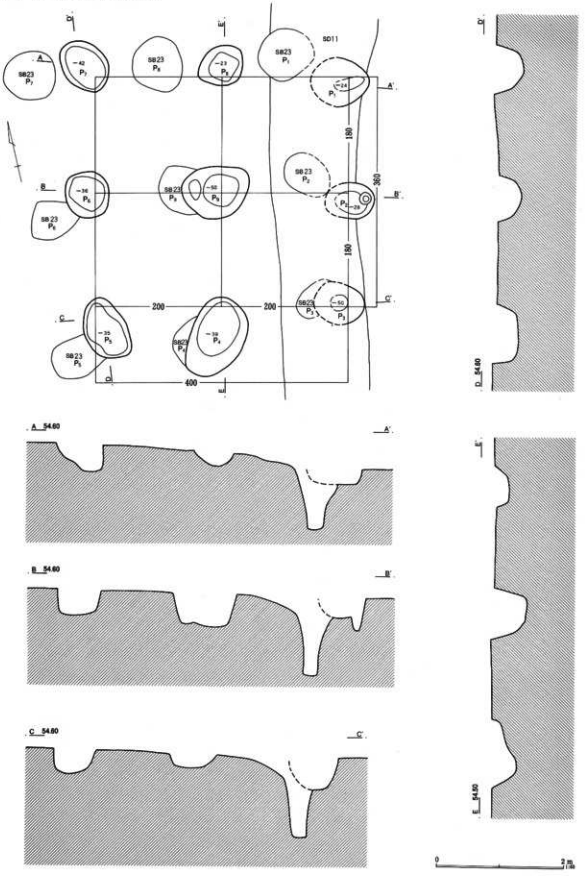
第209図　A区第24号掘立柱建物跡出土遺物



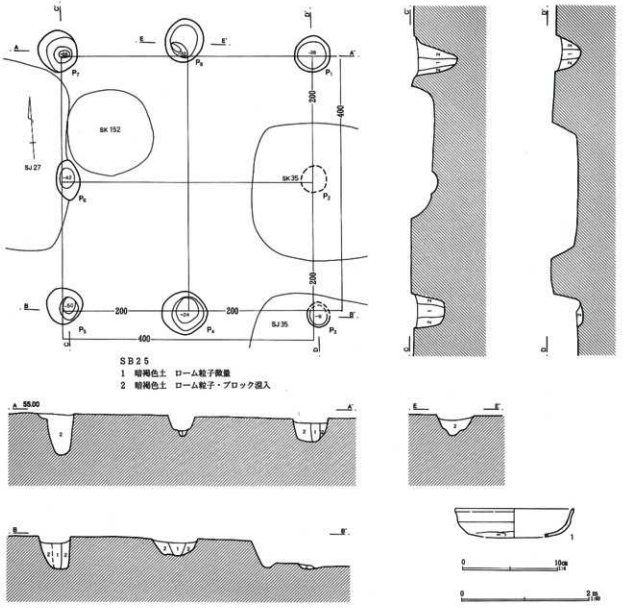
第104表　A区第24号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第209図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師暗文坏	(14.0)	2.3		BCDG	A	明褐色	15%	Pit6。内面放射暗文
2	須恵坏		2.1	8.8	BC片	C	灰褐色	25%	Pit7。末野産。底部十体部下端部回転ヘラケズリ

第210図　A区第24号掘立柱建物跡



第211図　A区第25号掘立柱建物跡・出土遺物



柱間距離は桁行2.30m、梁行2.50mとなる。柱痕または抜き取り痕はPit 4・5を除く柱穴で確認された。埋土は第1・2層が柱痕及び抜き取り痕。第3層以下が掘り方埋土である。Pit 9では褐色土と黄褐色土が互層となっていた。

柱穴形態は円形、楕円形が主体であるが、方形を意識したものも見られる。深度は40cm～80cmで、深くてしっかりしたものが多い。

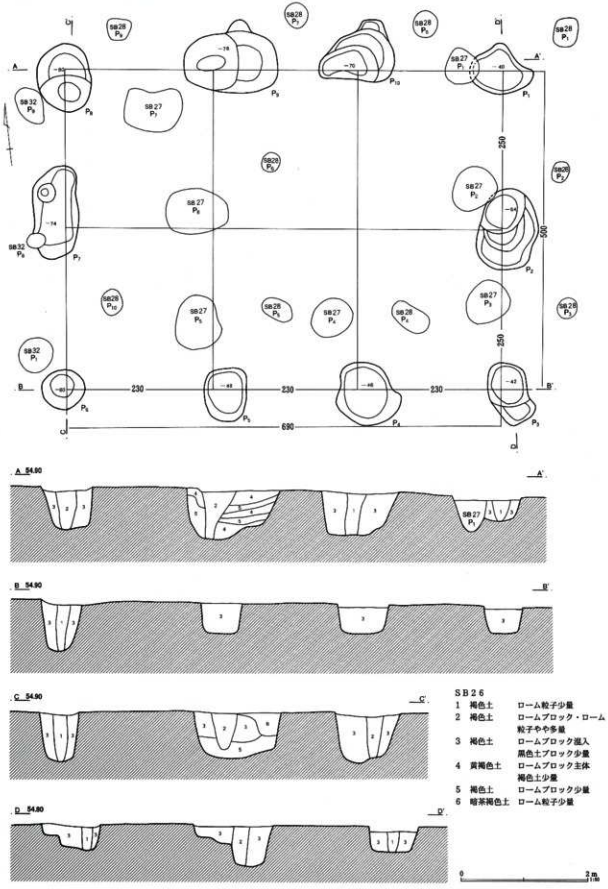
出土遺物は土師器皿・暗文皿、須恵器坏・蓋・高台盤がある(第213図)。4の高台盤底部は回転ヘラケズリ調整される。5の坏は大振りで体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。出土遺物は時期的にまとまりがあり、熊野Ⅱ期に相当するものと思われる。

建物跡の時期は不明確ではあるが、出土遺物から熊野Ⅱ期に構築されたものと考えておく。

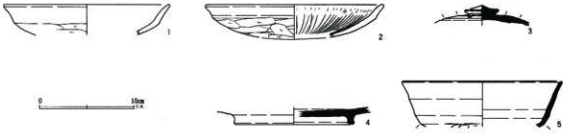
A区第27号掘立柱建物跡（第214図）

A区第27号掘立柱建物跡は42－10グリッドに位置する。第26号が重複し、断面観察により本建物跡の方が切っていた。第28号掘立柱建物跡は柱穴同士が

第212図　A区第26号掘立柱建物跡



第213図　A区第26号掘立柱建物跡出土遺物



第105表　A区第26号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第213図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師皿	(17.6)	3.2		ABD	A	褐色	5%	Pit1
2	土師暗文Ⅲ	(18.7)	3.4		BCD	A	淡褐色	20%	Pit10。内面放射暗文
3	須恵蓋		2.2		BC片	A	灰色	30%	Pit4。末野産。天井部回転ヘラケズリ＋ﾛｸﾛﾅﾃﾞ
4	須恵高台盤		1.8	(12.5)	B片	B	灰白色	30%	Pit6。末野産。底部回転ヘラケズリ＋高台貼付け
5	無台坏	(17.0)	4.8		BD片	D	淡褐色	5%	Pit9。末野産。体部下端手持ちヘラケズリ

直接切り合わないが、第28号掘立柱建物跡の方が新しいものと推定される。

2×2間、東西棟の側柱建物で、規模は桁行長4.80m、梁行長3.60mである。但し、北側桁行の中間柱は精査したものの検出されなかった。主軸方位はN－2°－Eを指す。

柱筋は西側梁行がきれいに通らない。柱間距離は桁行2.40m、梁行1.80mである。埋土は第2層が柱痕、第3層が掘り方である。

柱穴形態は円形または楕円形で、直径60～100cm前後、深さは45～80cmと比較的深くてしっかりしている。

出土遺物は土師器坏が2点出土している（第214図）。1はPit5から出土した北武蔵型坏で、口縁部は内彎気味に直立する。底部は丸底となろう。2は口縁部が外方に開くもので、底部は扁平な丸底風になると思われる。Pit7出土。

建物跡の時期は重複する第26号掘立柱建物跡との関係から熊野Ⅱ期以降となり、出土遺物は熊野Ⅱ期～Ⅲ期相当に位置付けられるものと考えている。第26号掘立柱建物跡の内側に納まることから、第26号から第27号掘立柱建物跡に直接建て替えられた可能性もあり、第26号掘立柱建物跡に続く時期、熊野Ⅲ期に構築されたものと考えておきたい。

A区第29号掘立柱建物跡（第215図）

A区第29号掘立柱建物跡は42·43－9·10グリッドに位置する。第78号住居跡、第144号土壙が重複し、本建物跡が最も古い。また、Pit2は第35号掘立柱建物跡Pit6と接するが、新旧関係は不明である。

2×2間、僅かに東西の長い総柱建物で、倉庫と考えて良いであろう。規模は桁行長3.60m、梁行長3.30mである。主軸方位はN－76°－Wを指す。

柱間距離は桁行1.80m、梁行1.65m等間にほぼ揃う。埋土は黒褐色土を基調としており、第1層が柱痕、第2層が掘り方埋土である。

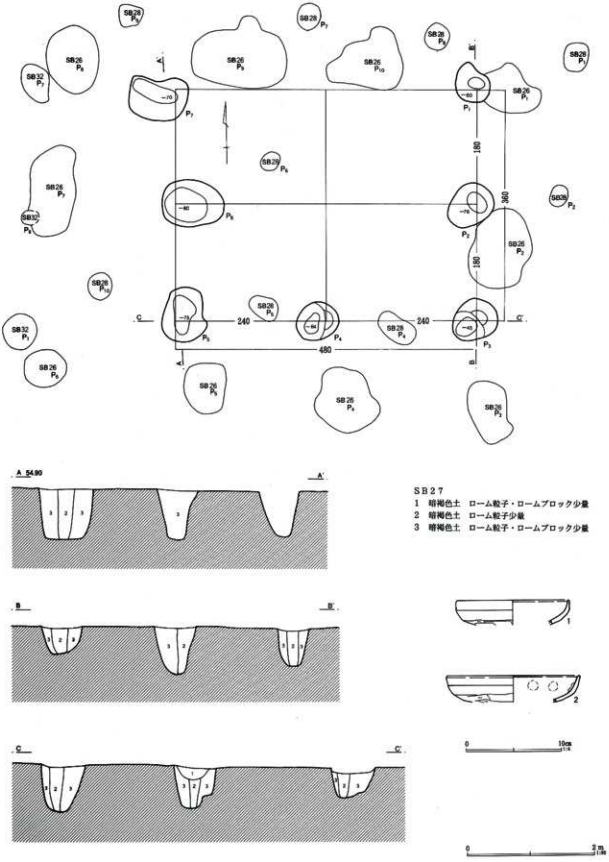
柱穴形態は円形または楕円形で、直径35cm～60cm前後と比較的小規模であるが、深さは42cm～74cmと非常に深くしっかりしている。

出土遺物は検出されず、建物の時期に関しては第78号住居跡との関係から中世以前という限定しかできない。

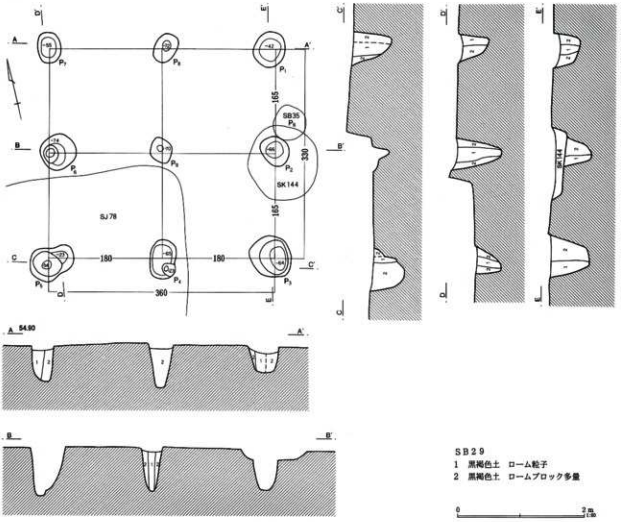
第106表　A区第27号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第214図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	11.8	2.6		AB	A	淡褐色	10%	Pit5
2	土師坏	(14.0)	2.8		BC	A	褐色	10%	Pit7

第214図　A区第27号掘立柱建物跡・出土遺物



第215図　A区第29号掘立柱建物跡



A区第30号掘立柱建物跡（第216図）

A区第30号掘立柱建物跡は42・43－9グリッドに位置する。第84・85・86号住居跡が重複し、平面及び断面観察から本建物跡の方が新しいことが判明した。また、第31・34号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切り合いはない。

3×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長6.00m、梁行長4.20mである。Pit6は第85号住居跡の調査が先行したために検出されなかった。主軸方位はN－11°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.00m、梁行2.10mとなる。柱痕または抜き取り痕は全ての柱穴で確認できたが、概ね等間に揃っている。柱筋はPit7がやや外側にずれ気味である。埋土は第1・2層が柱痕または抜き取り痕、第3層以下が掘り方埋土である。

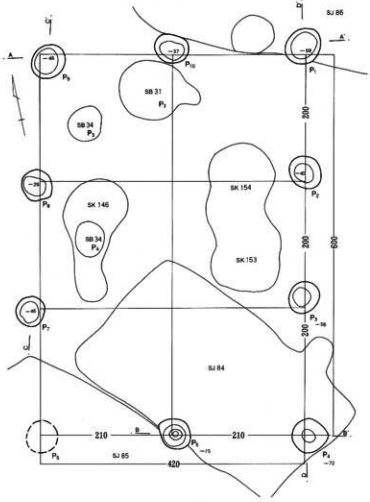
柱穴形態は円形で、直径50～60cm前後、深さは29～75cmとややばらつきがある。

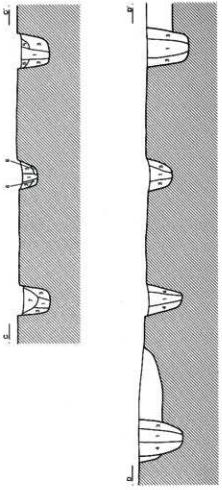
出土遺物は少なく、土師器坏・暗文坏、須恵器坏がある(第216図)。1は須恵器坏。底部は回転ヘラケズリ調整される。2は内屈口縁の北武蔵型坏。3は

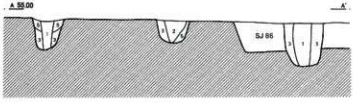
第107表　A区第30号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第216図）

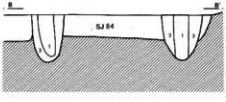
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵坏		1.0	8.4	BCD片	C	灰褐色	40%	Pit1。末野産
2	土師坏	12.0	3.0		BCD	A	褐色	5%	Pit4
3	土師暗文坏		3.3	(10.1)	B	A	明褐色	20%	Pit1。内面斜格子＋ラセン暗文

第216図　A区第30号掘立柱建物跡・出土遺物

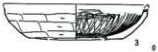








SB30
1　暗褐色土　ローム粒子微量
2　暗褐色土　ロームブロックやや多量
3　暗褐色土　ロームブロックやや少量
4　暗褐色土　ロームブロック多量
5　黒色土　焼土微量
6　明褐色土　ローム粒子・ロームブロックやや少量
7　褐色土　ロームブロック・ローム粒子やや多量



平底風の暗文坏。内面斜格子暗文と螺旋暗文が施される。また、底部外面にもヘラケズリ後のミガキが加えられている。1・3はPit1から出土し、重複する第86号住居跡から混入した可能性がある。2はPit4出土で、やはり重複する第84号住居跡からの混入と考えられ、時期決定の資料にはできない。

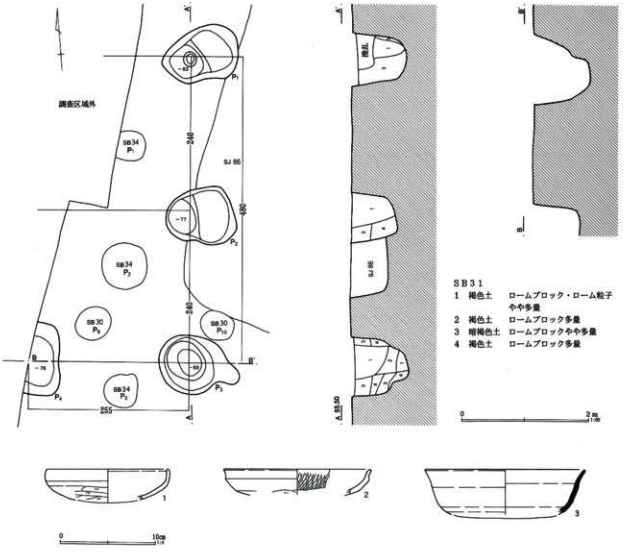
建物跡の時期は、重複遺構との関係から熊野Ⅱ期以降という限定ができるのみである。

A区第31号掘立柱建物跡（第217図）

A区第31号掘立柱建物跡は41·42－9グリッドに位置する。重複する第86号住居跡を切っていた。第30·34号掘立柱建物跡とも重複するが、柱穴相互の切り合いはない。

建物は調査区外に延びており、全体像は不明である。現状では2×1間以上で、おそらく東西棟の建物跡と推定される。規模は南北長4.80m、東西長2.55mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

第217図　A区第31号掘立柱建物跡・出土遺物



第108表　A区第31号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第217図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.8	3.2		BC	A	褐色	10%	Pit3
2	土師暗文坏	(15.5)	2.7		ABC	A	明褐色	5%	Pit3。内面斜格子暗文
3	須恵坏	17.0	4.7		BD片	C	灰褐色	10%	Pit4。末野産

柱間距離は南北の柱筋で2.40m、東西で2.55mである。埋土は第1・2層が柱抜き取り痕と思われる。第3・4層は掘り方埋土で、ロームブロックが多量に含まれていた。

柱穴形態は方形または不整方形で、長径100～120cm、深さ76～89cmと深くてしっかりした掘り込みである。

出土遺物は少なく、土師器坏・暗文坏、須恵器坏がある(第217図)。1はやや扁平な丸底形態の北武蔵型坏、2は丸底形態の暗文坏と思われ、内面に斜格子暗文が施文される。3は大振りの須恵器坏。1・2はPit3、3はPit4から検出され、遺物の時期はすべて熊野Ⅱ期段階と見て良かろう。重複する第86号住居跡はⅡ期に廃絶したと推定され、出土遺物及び新旧関係から、本建物跡は第86号住居跡廃絶直後、熊野Ⅱ期に構築された可能性がある。

A区第32号掘立柱建物跡（第218図）

A区第32号掘立柱建物跡は42－9グリッドに位置する。重複する第86号住居跡を切っていた。Pit8は第26号掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係は確認できなかった。

2×2間の側柱建物で、僅かに東西方向に長い。規模は桁行長4.40m、梁行長4.00mである。主軸方位はN－5°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.20mに揃うが、梁行は2.20mと1.80mで、等間には揃わない。埋土は第1層が柱痕、第2層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形が主体となり、直径は30～60cmと比較的小規模である。深さは62～82cmを測り、非常に深く掘り込まれている。やや小型で深い柱穴形態は第29号掘立柱建物跡と共通するものがある。

出土遺物は土師器坏と須恵器蓋がある(第218図)。1は丸底形態の北武蔵型坏で、第86号住居跡からの混入であろう。2は無かえりの須恵器蓋。南比企産で、熊野Ⅲ期以降のものと思われる。

建物跡の時期は重複遺構との関係から熊野Ⅱ期以降、出土遺物からみると熊野Ⅲ期以降ということになる。

A区第33号掘立柱建物跡（第219図）

A区第33号掘立柱建物跡は43·44－8·9グリッドに位置する。以降密集区の一角にあり、多数の以降と重複していた。第93・94・95号住居跡を切っており、第25・26・80号住居跡に切られていた。第31・32号住居跡との関係は不明確であるが、壁の遺存状態や床面の状態から本建物跡の方が古い可能性が高いものと判断した。

3×3間、南北棟の側柱建物で、西側柱列は調査区外に延びている。規模は桁行長6.30m、梁行長5.10mである。主軸方位はN－8°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.10m、梁行1.70m等間にほぼ揃う。埋土は第1・2層が柱抜き取り痕、第5～7層が掘り方埋土と考えられる。

柱穴形態は方形を基調としたもので、長径0.90m～1.74mと規模が大きい。確認面からの深さは70～80cm前後と非常に深い。

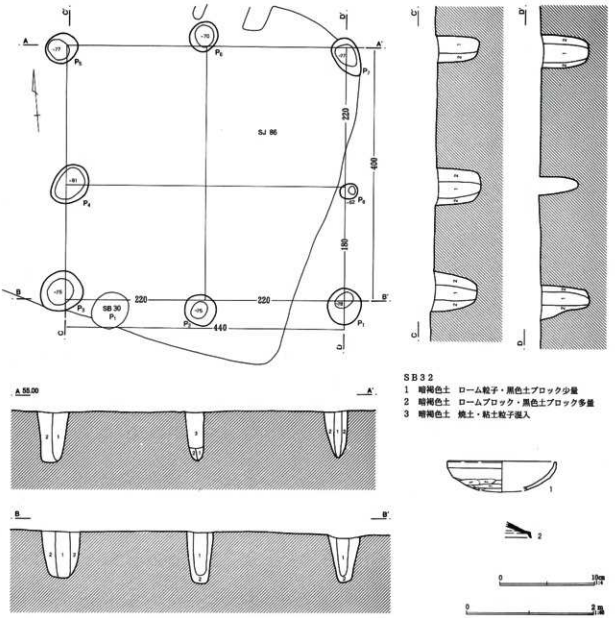
出土遺物は少ないが、土師器坏・壺・甕、須恵器坏がある(第220図)。1の土師器坏は扁平な形態で丸底風となる。2は須恵器坏で、底部を欠く。3は坏底部で、全面回転ヘラケズリ調整。4は土師器壺、5は武蔵型甕の底部である。1は熊野Ⅲ期相当、2・4は不明確であるがⅢ期以降となろう。3・4は重複住居からの混入と思われる。

重複遺構との関係から見ると、建物の時期は熊野Ⅱ期またはそれ以降、Ⅵ期以前という時期幅に納まる。遺物を勘案して、熊野Ⅲ期～Ⅳ期頃構築されたものと推定しておきたい。

第109表　A区第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第218図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(11.4)	3.0		ABCD	A	淡褐色	25%	Pit6
2	須恵蓋		1.6		針	A	灰色	5%	Pit1。南比企産

第218図　A区第32号掘立柱建物跡・出土遺物



第110表　A区第33号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第220図）

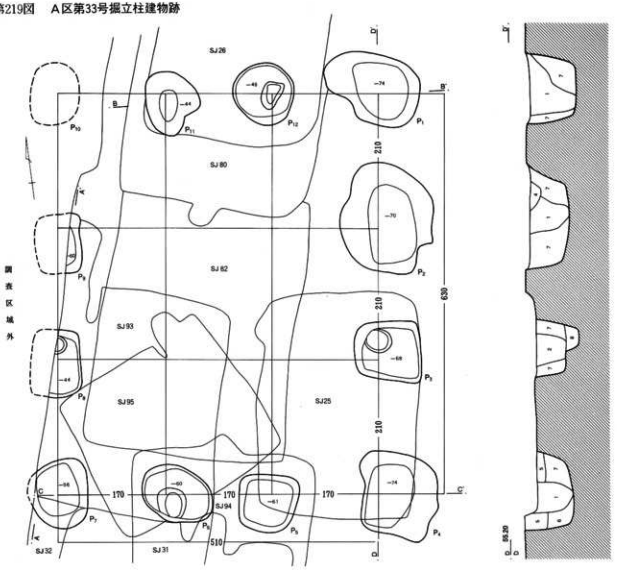
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(12.6)	2.6		AG	A	褐色	25%	Pit1
2	須恵坏	(12.4)	3.2		BC	B	黒灰色	15%	Pit2。末野産か
3	須恵坏		0.9	(7.6)	BC	B	灰白色	30%	Pit4。産地不明
4	土師壷	(20.6)	5.8		ABD	A	明褐色	5%	Pit8
5	土師甕		2.0	5.0	A	A	褐色	40%	Pit1

A区第34号掘立柱建物跡（第221図）

A区第34号掘立柱建物跡は42－8・9グリッドに位置する。Pit 4は第146号土壙に上面を削平されていた。また、第30・31号掘立柱建物跡が重複するが、柱穴相互の重複はない。東側柱列と南側柱列の一部が調査されたのみで、建物の大半は調査区外に延びている。

南北棟の建物と仮定すると、残存規模は桁行長5.70m、梁行長1.95mとなる。主軸方位はN－7°－Eを指す。

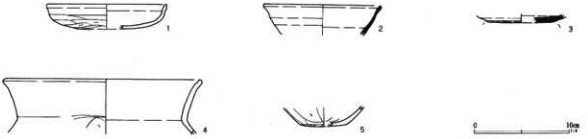
第219図　A区第33号掘立柱建物跡



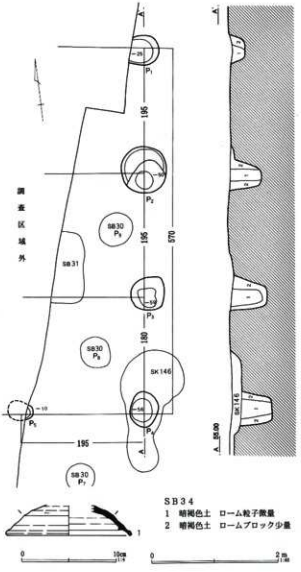
SB33

1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロックやや多量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
3　暗褐色土　ローム粒子少量
4　暗褐色土　ローム粒子微量
5　暗褐色土　ローム粒子多量
6　暗褐色土　大粒のロームブロック混入
7　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
　　黒色土ブロック混入
8　暗褐色土　ローム粒子少量

第220図　A区第33号掘立柱建物跡出土遺物



第221図　A区第34号掘立柱建物跡・出土遺物



柱間距離は桁行北側から順に1.95m、1.95m、1.80mとなり、等間に揃わない。梁行は1.95mである。埋土は暗褐色土を基調としており、第1層が柱痕または抜き取り痕、第2層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形で、直径は55cm～70cm、深さは底面まで達しないPit5を除くと、25cm～59cmを測る。Pit1が浅く、Pit2～Pit4が深い。

出土遺物は須恵器蓋がPit4から検出されたに留まる(第221図)。1は須恵器蓋で、推定口径13.0cm。胎土に白色粒子と片岩を含む。焼成は良好、灰色を呈する。15%残存する。末野産。

建物跡の時期は不明確であるが、出土須恵器から熊野Ⅱ期と考えておきたい。

A区第35号掘立柱建物跡（第222図）

A区第35号掘立柱建物跡は42·43－10グリッドに位置する。第75号住居跡・第114号土壙が重複し、本建物跡が古い。第29号掘立柱建物跡ともPit6が僅かに切り合うが、新旧関係は明確に把握できなかった。

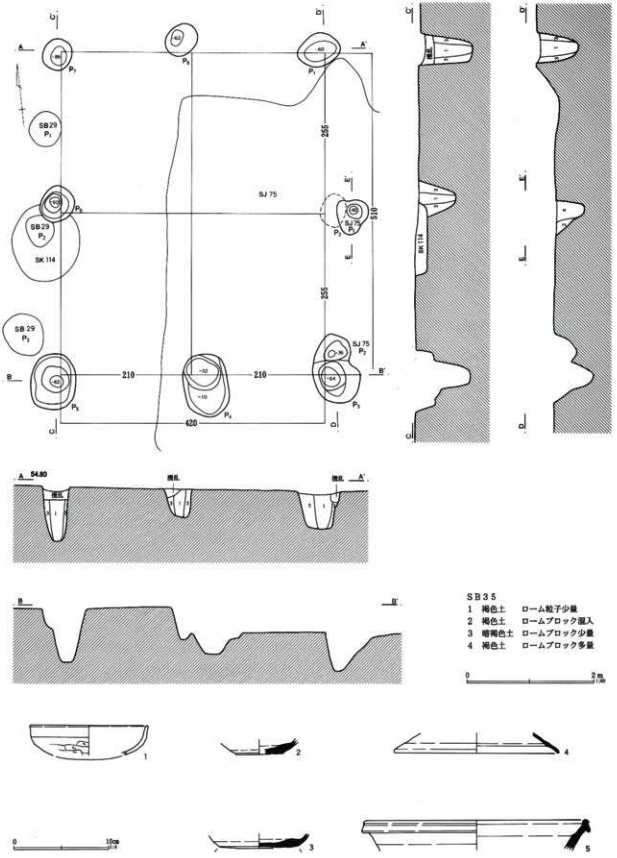
2×2間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長5.10m、梁行長4.20mである。Pit2は精査したが検出されず、柱筋からはずれるが、第75号住居跡Pit1としたものが、掘立柱建物跡柱穴と考えるのが妥当かもしれない。主軸方位はN－7°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.55m、梁行2.10mとなるが、柱痕位置はややずれるものがあり、等間にはならない。また、Pit2(SJ75Pit1)とPit8は柱筋からやや外側にはずれる。埋土は第1層が柱痕、第2層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形または楕円形で、直径50cm～90cm前後である。確認面からの深さは60cm～80cmと深くてしっかりしている。

出土遺物は少なく、土師器坏、須恵器坏・蓋・甕がある(第222図)。1は土師器坏で、丸底の北武蔵型坏。2は須恵器坏H？。底部はヘラ切り後ナデか。ヘラ切り面がもう1枚見える。3は坏で、底部ヘラ

第222図　A区第35号掘立柱建物跡・出土遺物



第111表　A区第35号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第222図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	(12.3)	3.1		ABC	A	淡褐色	10%	Pit8
2	須恵坏		1.6	5.2	BC	A	灰白色	25%	Pit8。末野産か
3	須恵坏		1.9	8.4	BC	B	灰褐色	35%	Pit2。末野産か。底部ヘラ切り後ナデ
4	須恵蓋	(17.2)	2.1		B片	B	灰色	5%	Pit3。末野産
5	須恵甕	(23.2)	3.2		BC片	B	灰色	5%	Pit3。末野産

切り後ナデ。4はかえり蓋。かえりは痕跡的である。5は須恵器甕。口唇部を外側に折り返している。

建物跡の時期は第75号住居跡との関係から熊野Ⅲ期またはそれ以前となる。出土土器は熊野Ⅰ期～Ⅱ期段階と思われ、Ⅱ期でも新段階に構築された可能性が高いであろう。

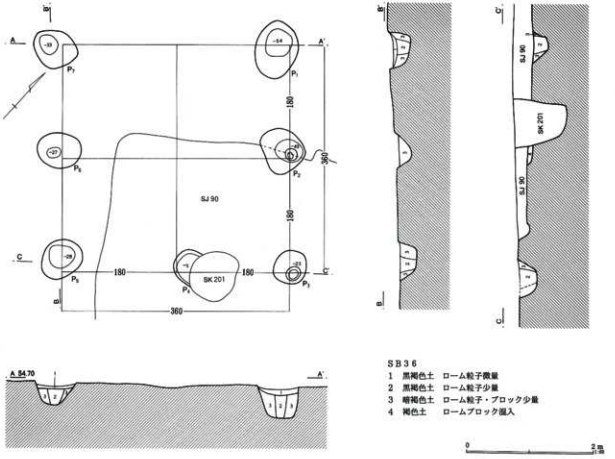
A区第36号掘立柱建物跡（第223図）

A区第36号掘立柱建物跡は40・41－10・11グリッドに位置する。第90号住居跡、第201号土壙が重複し、当初第201号土壙を本掘立柱建物跡の柱穴と誤認したために本建物跡の方が新しいと考えたが、断面観察や床面の遺存状態から、住居跡の方が新しいことが判明した。

2×2間、ほぼ方形の側柱建物で、規模は桁行長、梁行長共に3.60mである。但し、Pit1とPit7間の中間柱(Pit8)は精査したものの検出されなかった。また、Pit2は第90号住居跡床面下に辛うじて残るもので、本建物跡の柱穴として良いか疑念も残る。本来2×1間の建物であった可能性も考慮すべきかもしれない。主軸方位はN－43°－Wを指す。

柱間距離は1.80m等間となるが、Pit2はややずれ気味である。埋土は第2層が柱抜き取り痕、第3層

第223図　A区第36号掘立柱建物跡



が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形または楕円形で、直径55cm～90cm。深さは27cm～54cmとやや浅い。

遺物は全く検出されなかった。建物跡の時期は第90号住居跡との新旧関係から熊野Ⅰ期またはそれ以前となる。集落形成期のⅠ期以前に遡ることは考慮外とすると、熊野Ⅰ期の時間幅の中で、本建物跡が廃絶され、第90号住居跡に建て替えられたものであろう。

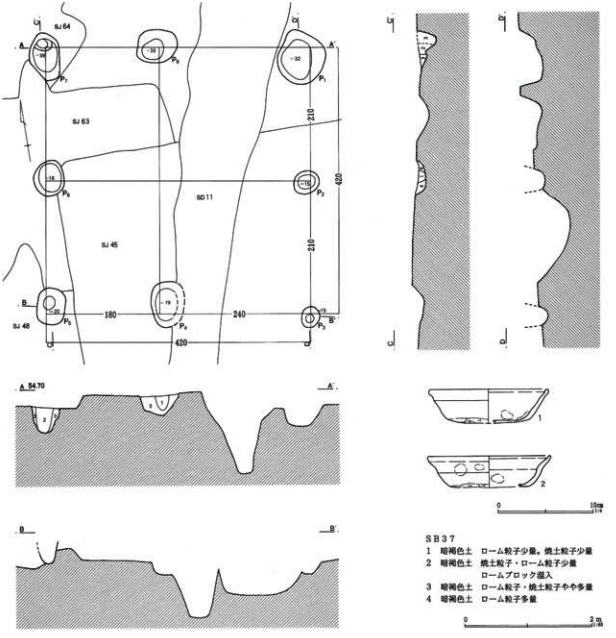
A区第37号掘立柱建物跡（第224図）

第224図　A区第37号掘立柱建物跡・出土遺物

A区第37号掘立柱建物跡は45･46－11グリッドに位置する。遺構密集区の中にあり、多数の遺構と重複している。新旧関係は第45･48･63･64号住居跡を切り、第11号溝跡に切られていた。

2×2間、方形の側柱建物で、規模は桁行長、梁行長共に4.20mである。主軸方位はN－10°－Eを指す。

仮に南北を桁行、東西を梁行とすると、柱間距離は桁行では2.10m等間に揃うが、梁行は西から1.80m、2.40mと等間に揃わず、中間柱が西寄りに振れ



第112表　A区第37号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第224図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	12.4	3.6		BC	A	褐色	25%	Pit№註記不鮮明
2	土師坏	13.0	3.2		BCD	A	明褐色	20%	Pit7

ている。埋土は第1・2層が柱抜き取り痕と思われ、焼土粒子が含まれる。第3・4層が掘り方埋土で、第3層には焼土が多く含まれていた。

柱穴形態は楕円形で、Pit2・Pit3を除くと直径60～90cm、深さは上面が削平されているものが多く、40cm以下と全体に浅い。

出土遺物は土師器坏が2点ある（第224図）。図化した以外に底部糸切り後無調整の須恵器坏破片がある。1・2は平底形態の土師器坏で、1は体部が直線的で、やや深身。2は口縁部から体部にかけてS字状に屈曲するタイプである。

建物跡の時期は重複遺構との関係から熊野Ⅳ期以降となる。出土遺物は熊野Ⅵ期段階と見て良いものであり、建物の構築時期もⅥ期と考えておきたい。

A区第39号掘立柱建物跡（第225図）

A区第39号掘立柱建物跡は44－12･13グリッドに位置する。南側には第11号掘立柱建物跡が軸を揃えて構築されている。第65号住居跡と重複するが、町教育委員会調査区にあり、新旧関係は不明である。

3×2間、南北棟の側柱建物と考えたが、北東隅柱（Pit1）は精査したにも関わらず検出できなかった。同時に2×2間の建物も想定したが、Pit2、Pit8間にも柱はなく、結局不明確ながら3×2間の建物とした。規模は桁行長7.20m、梁行長4.80mである。主軸方位はN－2°－Eを指す。

柱穴心々間の柱間距離は桁行梁行共に2.40mとなるが、柱痕位置はややずれるものがある。埋土は第1層が柱痕または抜き取り痕、第2・3層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形または楕円形で、直径65cm～120cm。深さは24cm～70cmで、比較的浅いものが多い。

出土遺物は少なく、土師器坏と須恵器蓋つまみがある（第225図）。出土遺物の時期は熊野Ⅰ～Ⅱ期である。Ⅲ期後半～Ⅳ期に構築された第65号住居跡との関係が不明で時期を確定できない。南側に隣接する第11号掘立柱建物跡とほぼ軸が揃って直列することから、併存または連続する時期と捉えれば熊野Ⅴ～Ⅵ期を中心とする段階となろう。

A区第40号掘立柱建物跡（第226図）

A区第40号掘立柱建物跡は39－17･18グリッドに位置する。第181号土壙が建物内部にあるが、直接重複する遺構はない。

3×2間、東西棟の側柱建物で、規模は桁行長5.70m、梁行長4.20mである。主軸方位はN－10°－Eを指す。

柱間距離は桁行1.90m、梁行2.10m等間に揃う。柱痕は全ての柱穴で確認され、埋土は第1・2層が柱痕、第3～6層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形で、直径60cm前後、深さ50cm前後のものが主体を占める。

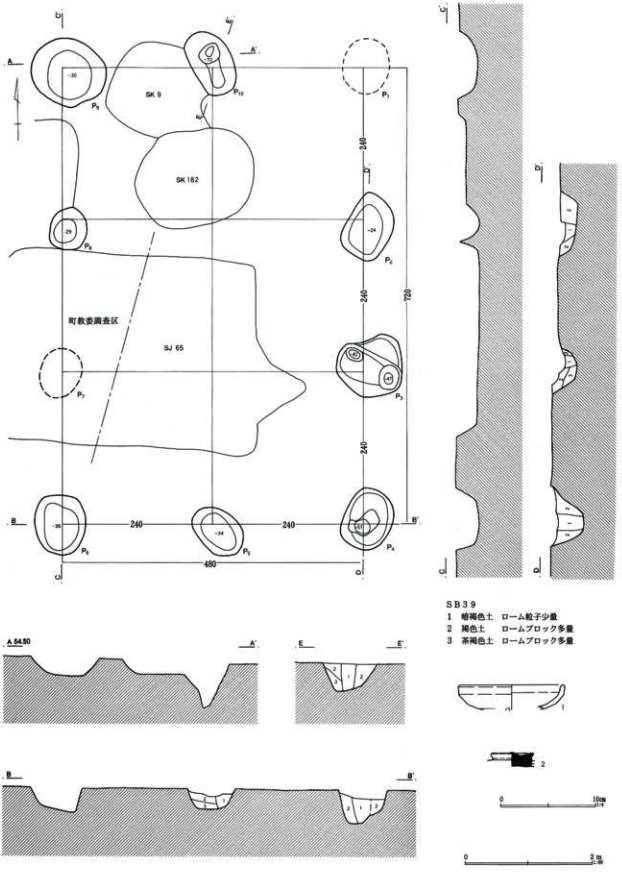
出土遺物は須恵器蓋・甕、鉄製品がある（第226図）。1は蓋としたが、口径20cmを越える可能性もあり、高盤となるかもしれない。2は須恵器甕。3は角棒状鉄製品。4は不明鉄製品。断面レンズ状になるが、銹化が著しく刃が付くかどうかは不明瞭。

建物跡の時期は不明確である。1が蓋とすれば、熊野Ⅲ期以降となろうが、下限を押さえる資料に欠

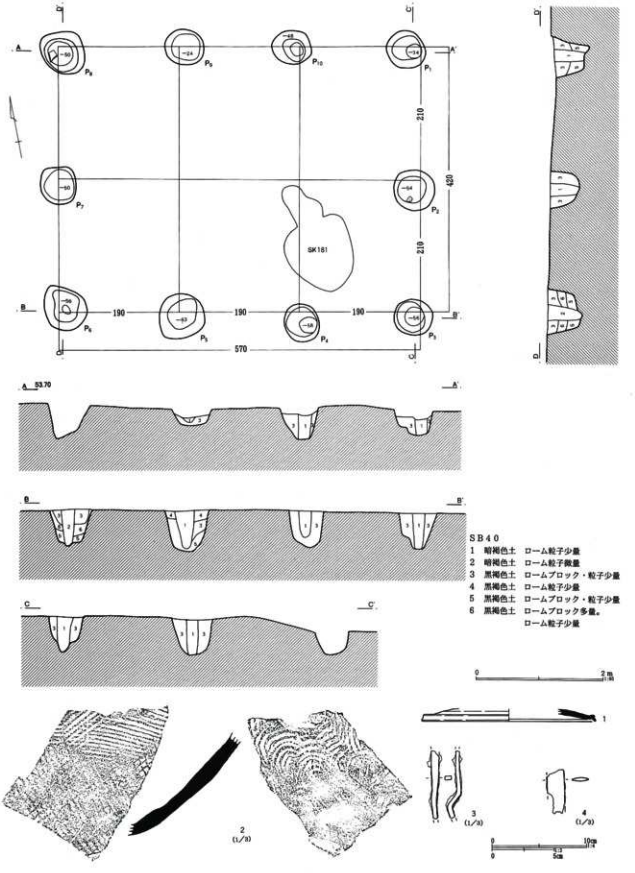
第113表　A区第39号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第225図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	11.0	2.6		BD	A	褐色	10%	Pit3
2	須恵蓋		1.5		BDE片	C	灰褐色	70%	Pit6。末野産。つまみ径(4.6cm)

第225図　A区第39号掘立柱建物跡・出土遺物



第226図　A区第40号掘立柱建物跡・出土遺物



第114表　A区第40号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第226図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器	18.3	1.3		BD片	C	灰色	5%	Pit4。未野産
2	須恵甕				BDE片	C	淡褐色		Pit2。未野産
3	不明鉄製品	Pit5　覆土。残長5.4cm。角棒状で湾曲する							
4	不明鉄製品	Pit5。残長3.4cm							

ける。

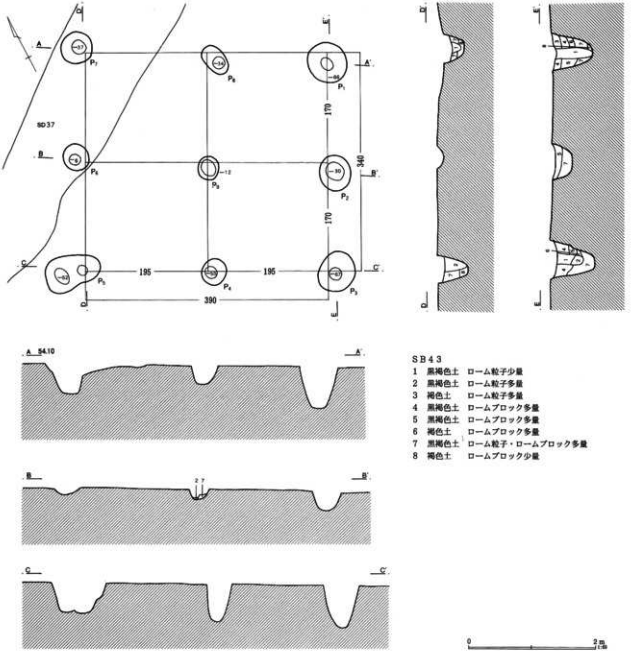
A区第43号掘立柱建物跡（第227図）

A区第43号掘立柱建物跡は38－14グリッドに位置する。第37号溝跡が柱穴上面を削平していた。

2×2間の総柱建物で、規模は桁行長3.90m、梁行長3.40mである。主軸方位はN－60°－Wを指す。

柱間距離は桁行1.95m、梁行1.70mとなるが、ややずれ気味の柱穴もある。埋土は第1・2層が柱痕または抜き取り痕、第3層以下は掘り方埋土である。柱穴形態は円形基調で、直径35cm～60cmのものが主

第227図　A区第43号掘立柱建物跡



体となる。深さはPit６・Pit９が極端に浅いが、隅柱は深くてしっかりしている。埋土は、第１・２層が柱痕、第３層以下は掘り方埋土である。

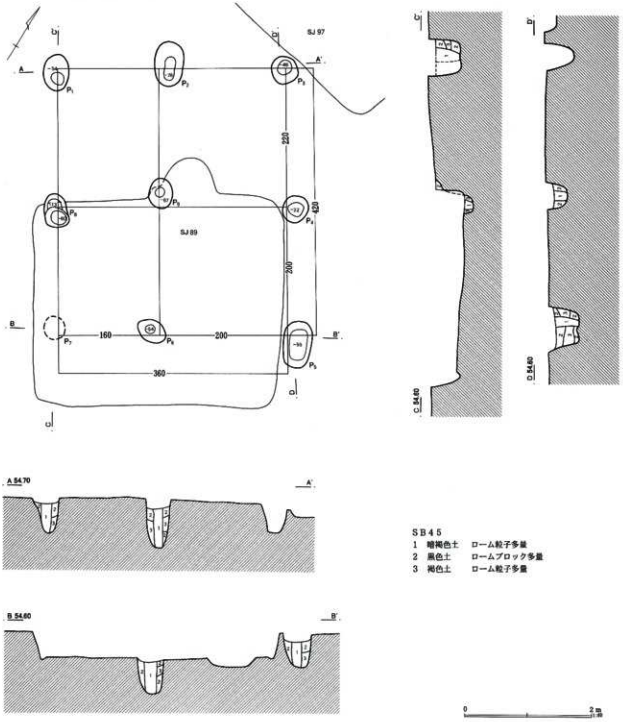
遺物は検出されず、建物の時期は中世以前という限定ができるのみである。

Ａ区第45号掘立柱建物跡（第228図）

A区第45号掘立柱建物跡は40－11グリッドに位置する。第89号住居跡が重複し、平面及び断面観察から本建物跡の方が古いことが判明した。

２×２間の総柱建物で、規模は桁行長4.20m、梁行長3.60mである。但し、Pit７は第89号住居跡床面を精査したが、床面下の掘り込みは検出されなかっ

第228図　Ａ区第45号掘立柱建物跡



た。主軸方位はN－32°－Wを指す。

柱間距離は不揃いで、桁行が2.00mと2.20m、梁行が1.60mと2.00mとなる。埋土は第1層が柱痕、第2・3層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形または楕円形で、確認面からの深さは50cm～90cmと深いものが多い。特にPit 6は確認面からの深さは100cmにも及んでいた。

出土遺物は検出されなかった。建物跡の時期は重複する第89号住居跡が熊野Ⅱ期に位置付けられ、それ以前となることは確実である。おそらく熊野Ⅰ期と考えて良いであろう。

A区第47号掘立柱建物跡（第229図）

A区第47号掘立柱建物跡は調査区北端部の36·37－14·15グリッドに単独で位置する。

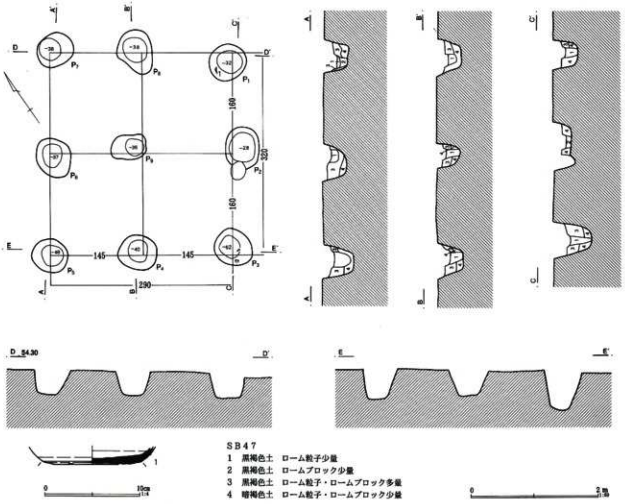
2×2間の総柱建物で、規模は桁行長3.20m、梁行長2.90mである。主軸方位はN－37°－Eを指す。

柱間距離は桁行1.60m、梁行1.45mとなるが、中心のPit 9はうまく柱筋に乗らず、やや北にずれている。埋土は第1・2層が柱痕または柱抜き取り痕。第3・4層が掘り方埋土である。柱穴形態は円形または楕円形で、直径55cm～65cmほどである。

出土遺物はPit 1から須恵器坏が検出されている。1は須恵器坏。推定底径10.6cmで、胎土に白色粒子と片岩を含む。焼成は普通で、色調は灰色から灰褐色。33%残存。底部から体部下端にかけて全面回転ヘラケズリ調整される。末野産。

出土土器は熊野Ⅱ期、底部が厚く、比較的古相を呈するものと思われる。建物時期は特定できないが、熊野Ⅱ期と考えておきたい。

第229図　A区第47号掘立柱建物跡・出土遺物



4．掘立柱建物跡（中世）

中世の掘立柱建物跡は10棟または11棟検出された。第28号掘立柱建物跡は他の中世建物に比較するとやや柱穴が大きく、円形であることから古代の所産である可能性もあるが、柱並びが悪く、古代にしても違和感のあるもので、取り敢えず中世に含めておいた。

中世建物の特徴は柱穴形態が方形で、規模が小さいこと、柱筋が通らないものや柱間が一定しないものも目立つ。同一形態の小ピット群は多数検出されているが、建物として組合せができなかったものがほとんどである。

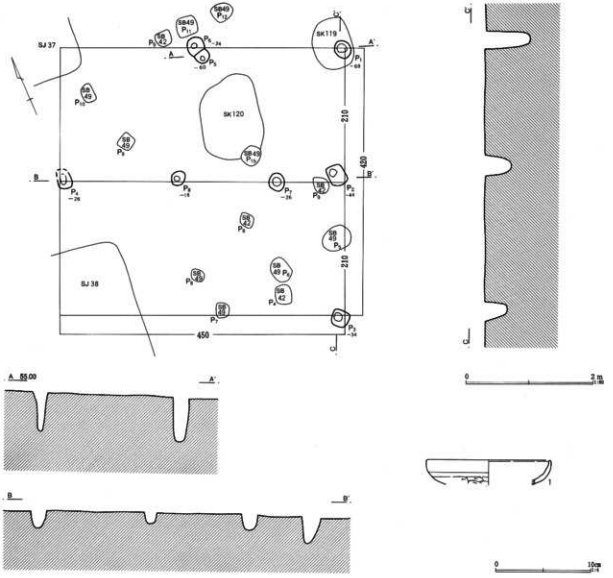
A区第13号掘立柱建物跡（第230図）

A区第13号掘立柱建物跡は45－10グリッドに位置する。第42・49号掘立柱建物跡周辺の中世ピット群から復元した。北西及び南西隅柱は第37・38号住居跡（中世の竪穴状遺構）と重複しており、検出されなかった。第119号土壙はPit 1に切られていた。

2×2間、東西棟の建物と想定した。規模は桁行長4.50m、梁行長4.20mである。主軸方位はN－23°－Eを指す。

柱間距離は梁行が2.10m、桁行は柱間が揃わない。南側桁柱は第49号掘立柱建物跡Pit 7と共有する。

第230図　A区第13号掘立柱建物跡・出土遺物



中軸線上に乗るPit７・Pit８は柱間が一定しない。埋土は黒褐色土を基調としていた。

柱穴形態は方形で、直径20cm～30cmと小規模で、深さは18cm～68cmとばらつきがある。

出土遺物はPit８から土師器坏が検出されたが混入である。１は土師器坏。推定口径13.0cm。胎土に白色粒子を含み、焼成は良好。褐色で残存率は約10%。

建物跡の時期は中世であるが、それ以上の限定は困難である。

Ａ区第18号掘立柱建物跡（第231図）

Ａ区第18号掘立柱建物跡は44－10グリッドに位置する。第16・17号掘立柱建物跡が重複するが、柱穴同士の切り合いはない。

２×２間、小規模な東西棟の建物で南側に廂が付く構造と推定される。規模は桁行長3.60ｍ、梁行長2.60ｍで廂の出は0.50ｍとなる。主軸方位はＮ－８°－Ｅを指す。

柱間距離は桁行1.80ｍ、梁行1.30ｍ等間に揃う。但し、中軸線上に乗るPit９は東側に寄っており、等間には揃わない。また、南東隅の廂柱は検出されなかった。埋土は黒褐色土を基調としていた。

柱穴は長径20cm～40cm程度の方形で、深さは20cm～30cm程度と比較的浅い。

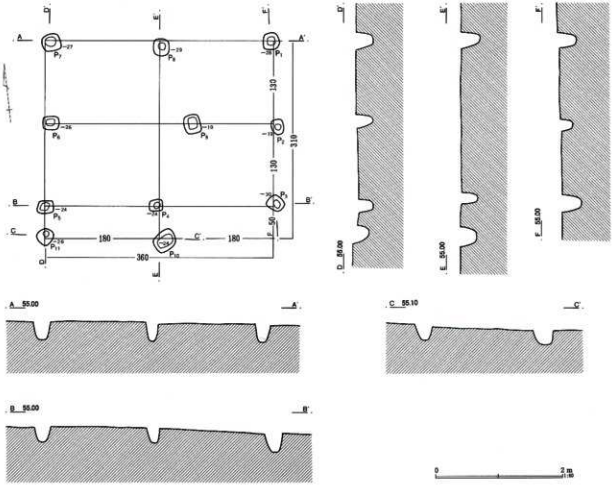
出土遺物は検出されなかった。建物跡の時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

Ａ区第28号掘立柱建物跡（第232図）

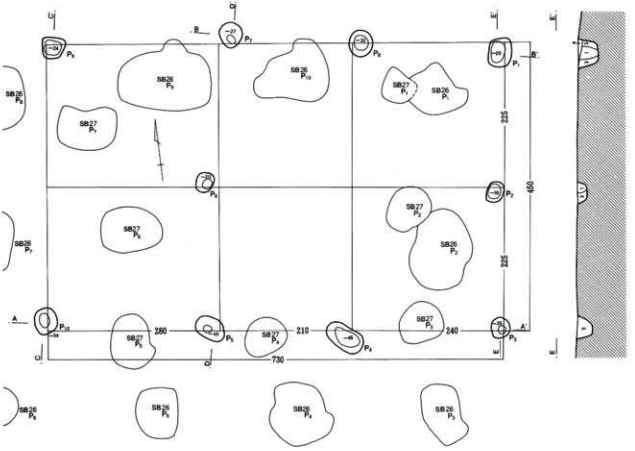
Ａ区第28号掘立柱建物跡は42－10グリッドに位置する。第26・27号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴同士の切り合いはない。

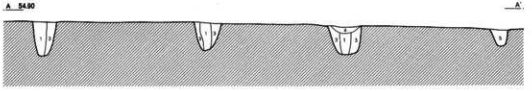
３×２間、東西棟の建物と捉えておく。規模は桁行長7.30ｍ、梁行長4.50ｍである。主軸方位はＮ－82°－Ｗを指す。

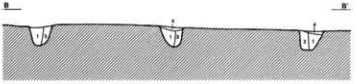
第231図　Ａ区第18号掘立柱建物跡

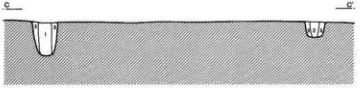


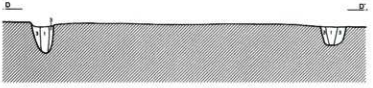
第232図　A区第28号掘立柱建物跡











SB28

1　褐色土　ロームブロック・ローム粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子斜降状に混入
3　褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量
4　暗褐色土　ロームブロック・黒色土・焼土粒子少量
5　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子少量

柱筋はきれいに揃わず、西側梁行の中間柱は精査したものの検出されなかった。また、中軸線上に乗るPit６は梁行のPit５、Pit７を結ぶ線上からははずれる。柱間距離は梁行は2.25ｍとなるが、桁行では西から2.80ｍ、2.10ｍ、2.40ｍと不揃いである。埋土は第１層が柱痕、第２・３層、５層が掘り方埋土である。

柱穴形態は円形、楕円形、方形とバラエティがある。深さは16cm～54cmである。

古代の可能性もあるが、柱筋、柱間が不揃いで、柱穴がやや小規模であることから中世の所産と捉えておきたい。

Ａ区第38号掘立柱建物跡（第233図）

Ａ区第38号掘立柱建物跡は44･45－９グリッドに位置する。第23･24号住居跡、第43号土壙と重複し、本建物跡の方が確実に新しい。

２×２間、南北棟の側柱建物で、規模は桁行長4.10ｍ、梁行長2.50ｍである。主軸方位はＮ－５°－Ｅを指す。

柱間距離は桁行が2.25ｍ、1.85ｍと等間に揃わない。梁行は1.25ｍ等間に揃う。

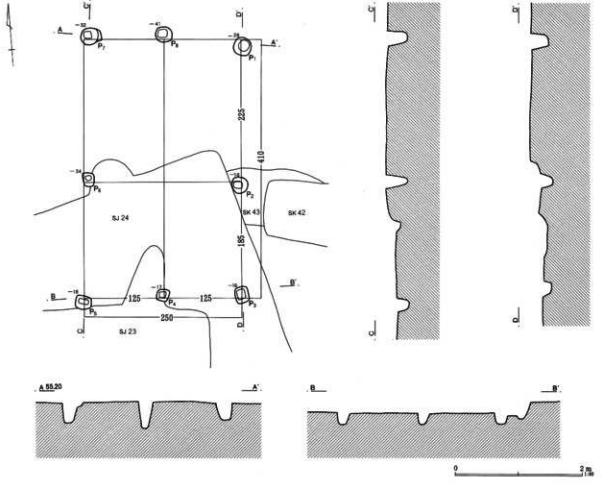
柱穴形態は方形で、規模は長径20～30cm、確認面からの深さ30～40cmほどと小規模である。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

Ａ区第41号掘立柱建物跡（第234図）

Ａ区第41号掘立柱建物跡は45－10･11グリッドに位置する。重複する第62･63･64号住居跡を切り、第11号溝跡に切られていた。第49号掘立柱建物跡、第８号土壙との新旧関係は不明である。

第233図　Ａ区第38号掘立柱建物跡



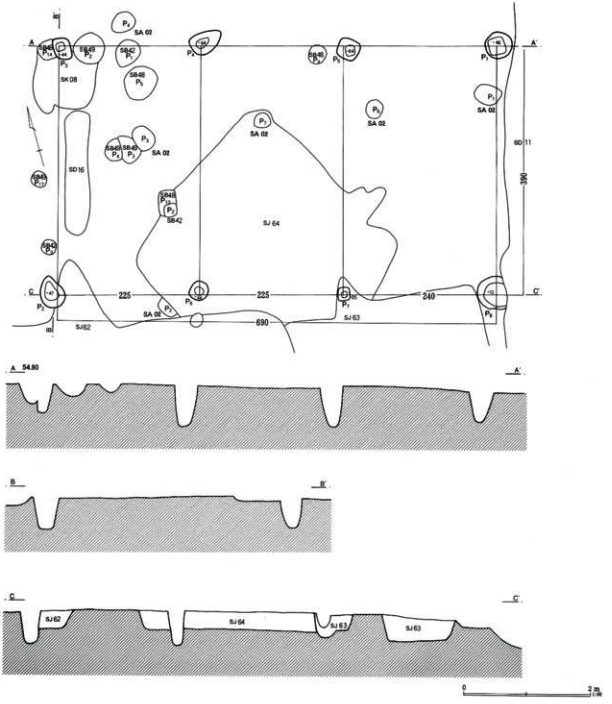
3×1間、東西棟の側柱建物と考えた。東西桁行の中間柱が検出されず、Pit 8が柱穴形態や深さの面で他の柱穴と異なる点はあるが、取り敢えず建物の一部に含めておいた。規模は桁行長6.90m、梁行長3.90mである。主軸方位はN－11°－Eを指す。

桁行の柱間距離は西から2.25m、2.25m、2.40mとなり、等間には揃わない。柱穴埋土は黒褐色土を基調としていた。

柱穴形態は方形を主体としており、長径20～45cmほどである。深さは40～65cm前後のものが多く、全体に深くしっかりしている。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は中世と考えられる。Pit 8の帰属が間違いなければ、第11号溝跡掘削以前に構築されたことになる。

第234図　A区第41号掘立柱建物跡



A区第42号掘立柱建物跡（第235図）

A区第42号掘立柱建物跡は45－10グリッドに位置する。第64号住居跡を切るが、第67号住居跡、第48号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。また、第13･41･49号掘立柱建物跡、第２号柱穴列が重複するが、柱穴同士の切り合いはなく新旧関係は不明である。

２×２間の、僅かに南北に長い建物で、規模は桁行長4.60ｍ、梁行長4.40ｍである。北東隅柱は第67号住居跡Pit６にほぼ重なる位置に存在したと推定されるが、住居の深さが深いために柱穴底面が床面まで達しなかったのであろう。主軸方位はＮ－２°－Ｗを指す。

柱間距離は等間に揃わない。Pit３とPit６を結ぶ線上にはPit７が乗る。また、Pit７とPit８のほぼ中間にPit９が位置する。区画施設か床束となるのかは不明であるが、建物に付属する可能性はある。

柱穴形態は方形である。直径は20～30cm前後が主体で、深さはばらつきが大きい。

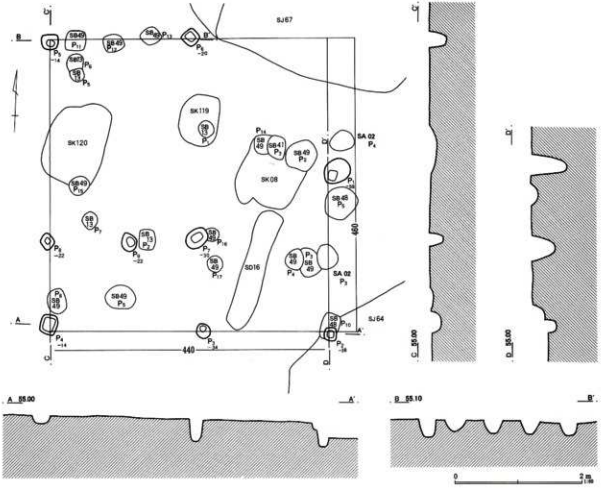
出土遺物はない。建物の時期は中世である。第67号住居跡との関係が不明であり、それ以上の限定材料がない。

A区第44号掘立柱建物跡（第236図）

A区第44号掘立柱建物跡は43－８、44－８･９グリッドに位置する。建物としての確認が遅れたために重複遺構との関係が明確に把握できなかったが、第82号住居跡、第33号掘立柱建物跡を切っていると判断して良い。第26･92号住居跡との関係は明確にできなかった。

南東隅柱が第92号住居跡の床面下に検出できなか

第235図　A区第42号掘立柱建物跡



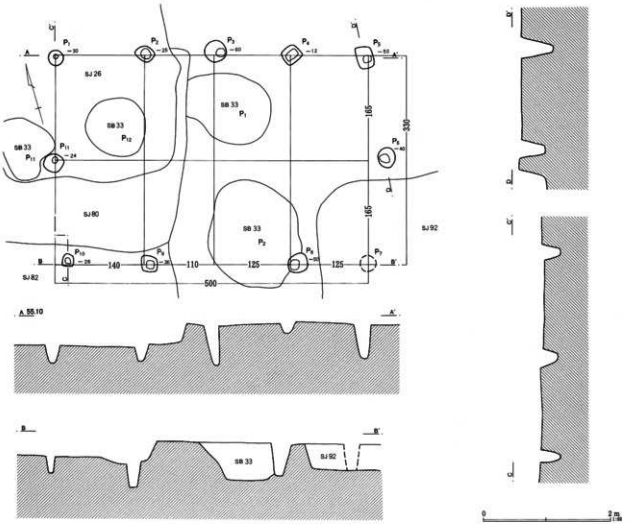
ったこと、南西隅柱がやや柱筋からややずれることなど問題もあるが、4×2間、東西棟の側柱建物と把握した。規模は桁行長5.00m、梁行長3.30mである。主軸方位はN－16°－Eを指す。

桁行の柱間距離は西から1.40m、1.10m、1.25m、1.25mとなり、等間に揃わない。また、南側桁行柱列の中央には柱穴が検出されなかった。梁行は1.65m等間に揃うが、Pit 6は柱筋から外にはずれ、棟持ち柱風となる。

柱穴形態は方形を主体とする。長径20～35cm前後と全体に小規模であるが、Pit 4を除くと深度は深いものが多い。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は中世と考えられるが、それ以上の限定はできない。

第236図　A区第44号掘立柱建物跡



A区第46号掘立柱建物跡（第237図）

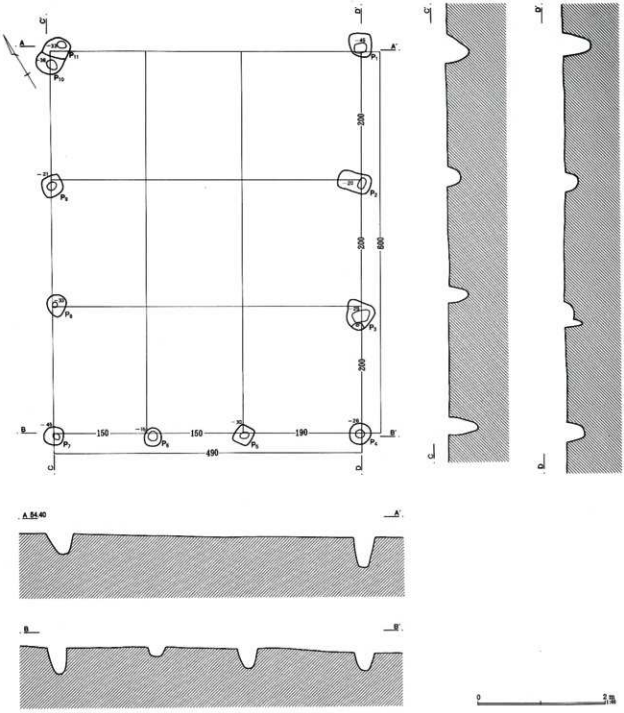
A区第46号掘立柱建物跡は37－13·14グリッドに位置する。建物周辺には中世のPitが群在するが、本建物跡以外には建物として組み合うものは見いだせなかった。

3×3間、南北棟の側柱建物と考えたが、北東妻側の中間柱は検出されなかった。規模は桁行長6.00m、梁行長4.90mである。主軸方位はN－30°－Eを指す。

柱間距離は桁2.00m等間、梁行は1.50m、1.50m、1.90mとなり等間には揃わない。

柱穴形態は方形を主体としていた。規模は長径30cm～55cm前後、深さ15～45cmと小規模である。埋土は黒褐色土を基調としていた。

第237図　A区第46号掘立柱建物跡



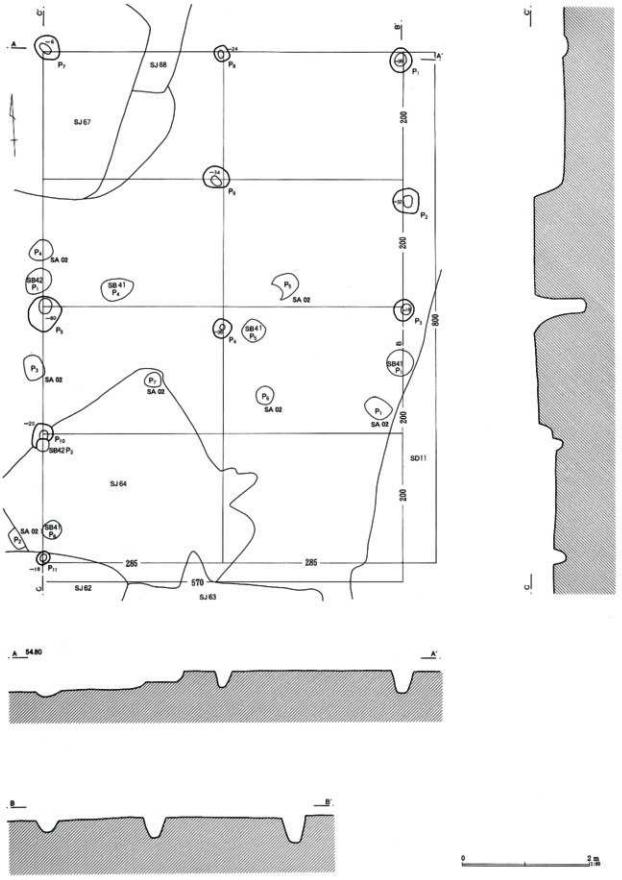
出土遺物は検出されなかった。建物の時期は柱穴形態や埋土の状態から中世と考えられる。

A区第48号掘立柱建物跡（第238図）

A区第48号掘立柱建物跡は44・45－11グリッドに位置する。第41・42号掘立柱建物跡、第2号ピット列、第67号住居跡など、中世遺構が集中する一角にある。古代の住居跡(SJ64)を切っているのは間違いないが、他の遺構との新旧関係は不明である。

4×2間の建物と把握したが、柱穴配置が不明確な部分があり、総柱となるかは不明である。規模は桁行長8.00m、梁行長5.70mである。主軸方位はN－3°－Eを指す。

第238図　A区第48号掘立柱建物跡



桁行の柱間距離は2.00mとなるが、Pit 2がややずれる。東側桁行の南から2本の柱穴は第11号溝跡によって削平されたものと思われ検出されなかった。西側桁行ではPit 5・Pit 7間の柱穴の有無が不明確である。梁行の柱間は2.85mとなるが、南妻の中間柱の有無は不明。また、Pit 4・Pit 9は中軸線上に乗り、床束とできようか。埋土は黒褐色土を基調としていた。

柱穴形態は方形が主体で、規模は長径、深さ共に25～35cmと小規模なものが多い。

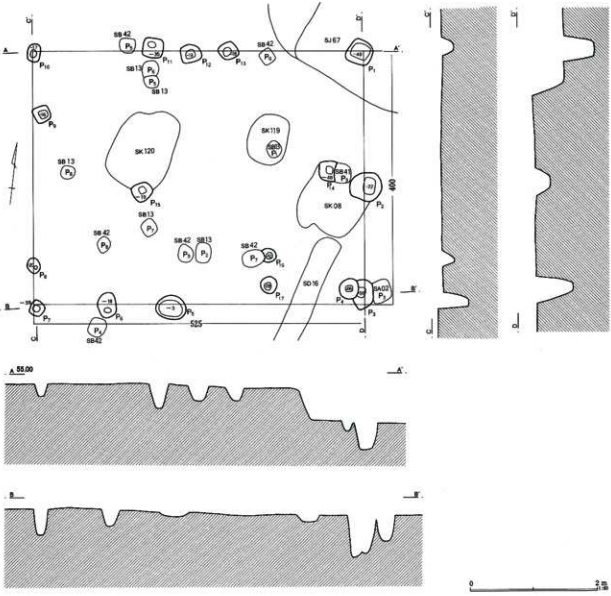
出土遺物は検出されなかった。建物の時期は中世であるが、それ以上の限定はできない。

A区第49号掘立柱建物跡（第239図）

A区第49号掘立柱建物跡は45-10グリッドに位置する。第67号住居跡が重複し、貼床の遺存状況から本建物跡の方が古いことが判明した。第2号ピット列、第13・41・42号掘立柱建物跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

柱筋が通らず、柱間も一定しないなど問題もあるが、取り敢えず東西棟の建物と把握しておく。規模は桁行長5.25m、梁行長4.00mである。主軸方位はN－6°－Wを指す。

第239図　A区第49号掘立柱建物跡



桁行の柱間は不揃いで、北側ではPit12がほぼ中央にあるが、Pit11・13は等間に揃わない。南側ではPit5・6が中軸線から西側に振れている。梁行はPit2は中軸線付近にあるが、西妻のPit8・9はずれている。

柱穴形態は方形主体である。規模はPit1・2が非常に深い。他のピットは小規模である。

出土遺物は検出されなかった。建物の時期は中世である。重複する67号住居跡との関係から13世紀後半、またはそれより遡る可能性もある。

A区第50号掘立柱建物跡（第240図）

A区第50号掘立柱建物跡は37－16・17グリッドに位置する。第70号住居跡が重複し、本建物の方が新しい。

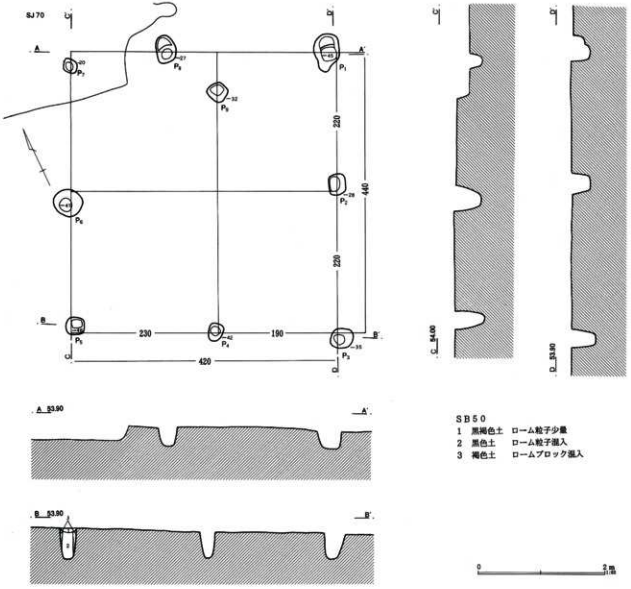
2×2間、僅かに南北の長い側柱建物で、規模は桁行長4.40m、梁行長4.20mである。主軸方位はN－26°－Eを指す。

柱間距離は桁行2.20m、梁行は不揃いである。Pit9は伴うか否か不明である。埋土は黒色土を基調としていた。

柱穴形態は方形で、規模は長径25～50cm前後が主体となる。深さは30～45cm前後である。

出土遺物はない。建物の時期は中世と考えられるが、それ以上の限定はできない。

第240図　A区第50号掘立柱建物跡



報告書抄録

ふりがな	くまのいせき
書名	熊野遺跡（A・C・D区）
副書名	岡部町岡中央団地関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	第1分冊
シリーズ名	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第279集
著者氏名	富田和夫
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1　℡0493-39-3955
発行年月日	西暦2002（平成14）年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
くまのいせき 熊野遺跡 (A・C・D区)	さいたまけんふかおさとぐんおかべまち 埼玉県大里郡岡部町 おおあざおかあざくまの 大字岡字熊野2899番地他 さいたまけんふかおさとぐんおかべまち 埼玉県大里郡岡部町 おかあざおかあざくまの 大字岡字熊野2993-3番地他	11405	017	36° 12′ 36″	139° 14′ 25″	19940601 ～19950331 19950401 ～19950831 19951001 ～19960229	13,400	団地建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊野遺跡 (A・C・D区)	集落跡	縄文時代		縄文土器・石器	畿内産土師器
		奈良・平安時代	竪穴住居跡　143軒	土師器	陶棺
			掘立柱建物跡　69棟	須恵器	カマド形土製品
			ピット列　1条	灰釉陶器	刻字紡錘車
			溝跡　6条	土製品	
			土壙　50基	石製品	
			井戸跡　1基	鉄製品	
			特殊遺構　10基	青銅製品	
			道路跡　1条	瓦	
		中世以降	竪穴状遺構　20軒	中世陶磁器	
			掘立柱建物跡　23棟	青磁碗	
			ピット列　3条		
			溝跡　44条		
			土壙　205基		
			土壙墓　1基		
			井戸跡　3基		
		その他	溝跡　7条		
			土壙　50基		
			ピット列　1条		
			道路跡　1条		
			特殊遺構　2基		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第279集

大里郡岡部町

熊野遺跡（A・C・D区）

岡部町岡中央団地関係埋蔵文化財発掘調査報告
第１分冊

平成14年３月15日 印刷
平成14年３月22日 発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　大里郡大里村船木台4-4-1
電話　0493(39)3955

印刷／㈱太陽美術